

# 「仏頂尊勝陀羅尼」の効能

—— 仏陀波利訳 『仏頂尊勝陀羅尼經』・訳注 ——

教学研究委員会編

(朝山・玄・徳重寛道・並木優記・野口善敬・矢多弘範(あいうえお選))

はしがき

「仏頂尊勝陀羅尼」は「淨除一切惡道仏頂尊勝陀羅尼」とも言われる。臨濟宗でも常用經典の一つとして広く知られ、鎮守火徳諷經や大般若祈禱の際に用いられている「陀羅尼」である。ただ、この「陀羅尼」は中國禪門では積極的に使用された形跡はなく、語録や清規類にその名前は見えていない。もともと天台宗や真言宗といった密教系の宗派で頻繁に誦誦されていたものであり、その影響の下、日本の禪門が独自に採用したものである。この「仏頂尊勝陀羅尼」が日本で一般に良く知られたものであったことは、この「陀羅尼」によつて百鬼夜行から救われたという話が、『大鏡』巻中(八二)や『今昔物語』卷一四(四二)などに見えていることから窺えるし、国史大系本『吾妻鏡』嘉祿元年(一二三五)五月一日条にもあるように写経も盛んに行われていたようである。

その「仏頂尊勝陀羅尼」が載せられた經典が、今回取り上げた『仏頂尊勝陀羅尼經』一卷であり、「陀羅尼」が説かれた因縁や、その功德と誦誦法が述べられている。

同経の漢訳としては、儀鳳四年（六七九）の杜行顛訳（T19-No.968）、永淳元年（六八二）の地婆訶羅（日照三藏法師）訳（T19-No.969）、仏頂最勝陀羅尼経）、永淳二年（六八三）の仏陀波利訳（T19-No.967）、景龍四年（七一〇）の義淨訳（T19-No.971）、仏説仏頂尊勝陀羅尼経）があり、その他、地婆訶羅の別訳に『最勝佛頂陀羅尼淨除業障呪経』（T19-No.970）がある。この中で、最も著名で広く読まれたものが仏陀波利訳である。その訳出された経緯については、この訳注の「仏頂尊勝陀羅尼経序」に詳しいので参照されたい。未訳として、中国では唐の法崇撰『仏頂尊勝陀羅尼経教跡義記』二巻（T19-No.1803）があり、日本では亮汰撰『科註尊勝陀羅尼経』三巻（延宝二年・前川茂右衛門板行）がある。

所載の「陀羅尼」そのものについては、諸本の間に文字の異同増減が多く、「この陀羅尼には全部で九種類の本がある（此陀羅尼、凡有九本）」（東寺三密藏古写本「仏頂尊勝陀羅尼」・建久二年奥書・T19-335c）と言われ、臨済宗で現用されているものは右記の五訳の經典所載の何れの「陀羅尼」とも異なっている。また「陀羅尼」そのものの梵語としての意味内容については優れた先論もあり、今回は訳注作業から除外し、口語訳については竹中智泰氏の訳文（木村俊彦・竹中智泰共著『禅宗の陀羅尼』・大東出版社・一九九八、所載）を、御厚意で転載させて頂いた。但し、禅門で現用されている「仏頂尊勝陀羅尼」の口語訳であり、仏陀波利訳の「陀羅尼」の直訳ではないことに注意が必要だが、その内容の大枠は変わらないと思われるし、逆に現用のものの口語訳の方が布教などに役立つかも知れない。

今回、仏陀波利訳の『仏頂尊勝陀羅尼経』の訳注に当たって底本として用いたのは、聖武天皇が僧玄昉の病氣治癒を祈願するために写させた勅願経である。高野山正智院に所蔵されているこの写経は、昭和十二年に国宝に指定されているが、奥書には「天平十一年五月四日奉 勅為玄昉僧正疹疾敬写此経一千卷」とあり、西暦七三九年のものであることが知られる。経末に「同本別翻」として別訳の「陀羅尼」が付載されており、これは

杜行顛訳『仏頂尊勝陀羅尼經』(T19353c-354a)所掲のものと、割り注を含めてほぼ同様であるが、磧砂藏本等には付載されていないため、訳注の際には削除した。

經典の具体的な内容については、本文を読んで頂ければ分かるが、その主題は、七日後に死んで畜生惡道の身を七返受けるはずであった善住天子を救済するために、釈尊が「陀羅尼」を教示するという内容であり、そのために説かれた「仏頂尊勝陀羅尼」は地獄・畜生といった惡道から救われる利益があるとされ、また更に惡病治療の効能も謳われている。土をつかんで陀羅尼を唱え、その土を亡者の遺骨に振りかければ、亡者は天に生ずることができると述べた一段などは、追善供養の代表的なものである。よって、内容的に火徳鎮守諷經にこの經を用いることは必ずしも相応しくなく、疑問が存することになる。これについては今後の研究課題としたい。

(野口善敬)

### 《凡例》

○底本には聖武天皇の發願にかかる国宝の天平十一年写本(昭和十二年・荻野仲三郎発行・コロタイプ複製本)を使用した。

○原文の文字の校勘には、磧砂藏本(『宋版磧砂大藏經』第一一冊・新文豊出版、原本影印)及び高麗藏本に拠っている大正大藏經本(第一九冊)を用い、【校注】を原文の末尾に附録した。

○原文は当用漢字を用い、書き下し文は現代かな使用とした。

○陀羅尼の部分については、訳注作業から除外し、口語訳部分は木村俊彦・竹中智泰著『禪宗の陀羅尼』（大東出版社・一九九八）から転載させて頂いた。

○現代語訳は直訳を心掛けたが、必要と思われる場合は「」で適宜ことばを補った。

○注に引用した書籍については、その初出の箇所に版本等を明記した。また大正大藏経・大日本統藏経（出統藏）についてはそれぞれ「T」「Z」の略号を用いた。その他の略号は次の通り。

『中村』 〓 中村元『仏教語大辞典』（東京書籍）

『広説』 〓 同 『広説仏教語大辞典』（同前）

『望月』 〓 望月信亨『仏教大辞典』（世界聖典刊行協会）

『禅学』 〓 駒沢大学『新版禅学大辞典』（大修館書店）

『仏光』 〓 『仏光大辞典』（台湾仏光出版社）

『織田』 〓 織田得能『仏教大辞典』（大倉書店・大蔵出版）

『岩波』 〓 中村元等編『仏教辞典』（岩波書店）

『大漢和』 〓 諸橋轍次『大漢和辞典』（大修館書店）

○読書会に参加して原稿を作成した担当者は次の五名である。（会にはオブザーバーとして玄侑宗久師も参加された。）

朝山一玄・徳重寛道・並木優記・野口善敬・矢多弘範（あいうえお順）

## 〔1〕序

### 【原文】

#### 仏頂尊勝陀羅尼經序

仏頂尊勝陀羅尼經者、婆羅門僧仏陀波利、儀鳳元年從西國來至此土、到五臺山次、遂五体投地、向山頂礼曰、如來滅後、衆聖潛靈、唯有大士文殊師利、於此山中、汲引蒼生、教諸菩薩。波利所恨、生逢八難、不覩聖容。遠涉流沙、故來敬謁。伏乞大慈大悲普覆令見尊儀。言已、悲泣雨淚、向山頂礼。礼已拳頭、忽見一老人從山中出來。遂作婆羅門語謂僧曰、法師情在慕道、追訪聖蹤。不憚劬勞、遠尋遺跡。然漢地衆生多造罪業、出家之輩亦多犯戒律。唯有仏頂尊勝陀羅尼經、能滅除惡業。未知法師願將此經來不。僧曰、貧道直來礼謁、不將經來。老人曰、既不將經、空來何益。縱見文殊、亦何必識。師可倒向西國、取此經來、流傳漢土、

### 【書き下し】

#### 仏頂尊勝陀羅尼經の序

仏頂尊勝陀羅尼經は、婆羅門僧の仏陀波利、儀鳳元年に西國より此土に來至し、五臺山に到りし次、遂に五体投地して、山に向かつて頂礼して曰く、「如來滅して後、衆聖、靈を潛む。唯だ大士文殊師利有つて、此の山中に於いて蒼生を汲引し、諸もろの菩薩を教う。波利、恨む所は、生まれて八難に逢い、聖容を觀ざることを。遠く流沙を涉つて、故らに來たつて敬謁す。伏して乞うらくは大慈大悲、普く覆いて尊儀を見せしめんことを」と。言ひ已わりて、悲泣して涙を雨ふらし、山に向かつて頂礼す。礼し已わつて頭を挙ぐるに、忽ち一老人の山中より出で來るを見る。遂に婆羅門の語を作し僧に謂いて曰く、「法師は情、道を慕いて聖蹤を追訪するに在り。劬勞を憚らず、遠く遺跡を尋ぬ。然れども漢地の衆生は多く罪業を造り、出家の輩も亦た多く戒律を犯す。唯だ仏頂尊勝陀羅尼經有つて、能く惡業を滅除す。未だ知らず、法師、願く

即是遍奉衆聖、弘利群生、拯濟幽明、報諸仏恩也。師取經來至此、弟子当示師文殊師利菩薩所在。僧聞此語、不勝喜躍。遂裁抑悲淚、至心敬礼。拳頭之頃、忽不見老人。其僧驚愕倍、更虔心繫念傾誠。迴還西国、取仏頂尊勝陀羅尼經、至永淳二年迴至西京、具以上事聞奏大帝。大帝遂將其本入内、請日照三藏法師、及勅司賓寺典客令杜行顛等、共訳此經。施僧絹三十匹、其經本禁在内不出。其僧悲泣奏曰、貧道捐軀委命遠取經來、情望普濟群生救拔苦難。不以財宝為念、不以名利関懷。請還經本流行、庶望含靈同益。帝遂留翻得之經、還僧梵本。其僧得梵本將向西明寺、訪得善梵語漢僧順貞、奏共翻訳。帝隨其請。僧遂対諸大徳共貞翻訳訖。僧將梵本向五臺山、入山於今不出。今前後所翻兩本並流行於代。小小語有不同者、幸勿怪焉。至垂拱三年、定覺寺主僧志靜、因停在神都魏国東寺、親見日照三藏法師、問其逗留、一如上説。志靜遂就三藏法師諮受

此の經を將ち來るや不や」と。僧曰く、「貧道直に來つて礼謁せんとせば、經を將ち來らず」と。老人曰く、「既に經を將たずして空しく來れば、何の益かあらん。縦い文殊に見ゆるも、亦た何ぞ必ずしも識らん。師、西国に倒向し、此の經を取り來つて漢土に流伝す可くんば、即ち是れ遍く衆聖を奉じて広く群生を利し、幽明を拯濟して諸仏の恩に報ずるなり。師、經を取りて此に來至せば、弟子當に師に文殊師利菩薩の所在を示すべし」と。僧、此の語を聞きて喜躍に勝えず。遂に悲涙を裁抑して至心に敬礼す。頭を挙ぐるの頃に、忽ち老人を見ず。其の僧驚愕すること倍し、更に心を虔み、念を繫け誠を傾く。西国に迴還して仏頂尊勝陀羅尼經を取り、永淳二年に至つて西京に迴至し、具に上事を以て大帝に聞奏す。大帝遂に其の本を將て入内せしめ、日照三藏法師に請じ、及び司賓寺典客令の杜行顛等に勅して、共に此の經を訳せしむ。僧に絹三十匹を施し、其の經本は禁じて内<sup>お</sup>に在きて出さしめず。其の僧悲泣して奏して曰く、「貧道、軀を捐て命を委てて遠く經を取り來るは、情に普く群生を濟い苦難より救拔せんことを望む。財宝を以て念と為さず、名利を以て懷に關らしめず。請うらくは經本を還して流行せしめ、庶わくは含靈同に益せ

神呪。法師於是口宣梵音、經二七日、句句委授、具足梵音、一無差失。仍更取旧翻梵本勘校、所有脱錯悉皆改定。其呪初注云最後別翻者是也。其呪句稍異於杜令所翻者。其新呪改定不錯并注其音訖。後有學者、幸詳此焉。至永昌元年八月、於大敬愛寺見西明寺上座澄法師、問其逗留、亦如前說。其翻經僧順貞現在住西明寺。此經救拔幽顯不思議、恐學者不知故、具錄委曲以伝未悟。

られんことを望む」と。帝遂に翻し得たる經を留めて、僧に梵本を還す。其の僧、梵本を得て、將て西明寺に向かい、梵語を善くせる漢僧の順貞を訪ね得て、奏して共に翻譯せんとす。帝、其の請に隨う。僧遂に諸大徳に對して貞と共に翻譯し訖わる。僧、梵本を將て五臺山に向かい、山に入りて今に於けるまで出ず。今、前後翻する所の兩本並びに代に流行す。小小の語に同じからざる者有るも、幸わくは怪しむこと勿かれ。垂拱三年に至つて、定覺寺の主僧の志靜、神都の魏国東寺に停在するに因りて、親しく日照三藏法師に見え、其の逗留を問うに、一に上に説くが如し。志靜遂に三藏法師に就きて神呪を諮受す。法師、是に於いて梵音を口宣し、二七日を経て、句句委さに授くれば、梵音を具足して、一も差失無し。仍お更に旧翻の梵本を取りて勘校し、所有脱錯、悉く皆な改定す。其の呪の初めに注して、「最後に別に翻す」と云う者は是れなり。其の呪の句、稍杜令翻する所の者に異なるも、其の新呪は改定して錯らず、並びに其の音を注し訖われり。後に學者有らば、幸わくは此れを詳かにせよ。永昌元年八月に至つて、大敬愛寺に於いて西明寺の上座の澄法師に見えて、其の逗留を問うに、亦た前に説くが如し。其の翻經僧の順貞、現在、

西明寺に住す。此の經の幽頭を救拔する不思議、學者の知らざるを恐るるが故に、具に委曲を録して以て未悟に伝うるなり。

【校注】

- (一) 經序 大正藏に拠れば、明本・黄檗本はこの下に「唐定覺寺沙門志靜述」の九字あり。
- (二) 此土 磧砂藏本同じ。大正藏本は「此漢土」に作る。
- (三) 拳頭 磧砂藏本同じ。大正藏本は「拳首」に作る。
- (四) 情在 磧砂藏本・大正藏本は「情存」に作る。
- (五) 能滅除惡業 磧砂藏本同じ。大正藏本は「能滅衆生一切惡業」に作る。
- (六) 僧曰 磧砂藏本同じ。大正藏本は「僧報言曰」に作る。
- (七) 曰 磧砂藏本同じ。大正藏本は「言」に作る。
- (八) 不將經 磧砂藏本・大正藏本は「不將經來」に作る。
- (九) 必識 磧砂藏本同じ。大正藏本は「得識」に作る。
- (一〇) 倒 磧砂藏本・大正藏本は「却」に作る。
- (一一) 來 磧砂藏本同じ。大正藏本は「將來」に作る。
- (一二) 幽明 磧砂藏本同じ。大正藏本は「幽冥」に作る。
- (一三) 施僧 磧砂藏本・大正藏本は「勅施僧」に作る。



- (二四) 匹ニ大正藏本同じ。磧砂藏本は「疋」に作る。
- (二五) 善ニ磧砂藏本は「解善」、大正藏本は「善解」に作る。
- (二六) 貞ニ大正藏本は「順貞」に作る。
- (二七) 向ニ磧砂藏本同じ。大正藏本は「遂向」に作る。
- (二八) 小小ニ磧砂藏本同じ。大正藏本は「其中小小」に作る。
- (二九) 現在ニ磧砂藏本・大正藏本は全て「見在」に作る。
- (三〇) 不思議ニ磧砂藏本・大正藏本は「最不可思議」に作る。
- (三一) 恐ニ磧砂藏本同じ。大正藏本は「恐有」に作る。

【口語訳】

仏頂尊勝陀羅尼經の序文

『仏頂尊勝陀羅尼經』(が中国に來た由來について)は(以下の通りである。つまり)、婆羅門僧である仏陀波利が、儀鳳元年(六七六)に西國インドより此土ちゆこくにやつて來て、五臺山(山西省)に行つた時、五体投地して山に向かつて頂礼らいはいして言つた、「如來が滅なくなられてから後、衆もろもろの(優れた)聖ぼまつがたは、靈(妙なる姿)を潜めてしまわれたが、文殊師利大士だけは、この山中で蒼生しやうじやうを汲引すくいあげて、もろもろの菩薩しきぎやうしやを教へておられる(とのこと)」。波利わたには、「この世に」生まれて(仏にお目にかかれぬ)八つの難(の中の仏前ぼんぜん仏後の時代)に逢い、(仏の)聖容おすがたを觀みられないことを残念に思い、遠く流沙さばくを涉こえて、わざわざ敬調おんごつかりにやつて來ました。どうか大いなる慈悲(の

心)を(私の上にも)普く覆い下さり、尊儀をお見せ下さい」と。言いおわつて、悲泣ながら涙を雨ふらし、山に向かつて頂礼した。「そして」礼しおわつて頭を挙げると、にわかには一人の老人が山中から出で来るのが見えた。そこで(その老人は)婆羅門の語を使って僧(仏陀波利)に言った、「法師は(仏)道を慕い(仏・菩薩の)聖蹟を追訪したいという情をお持ちだから、劬勞を憚らず、遠く(この)遺跡を尋ねてこられたのでしよう。ですが漢地の衆生は罪業をたくさん造り、出家した輩も多くは戒律を犯しています。この悪業を滅除できるのは『仏頂尊勝陀羅尼經』しかありません。どうでしょう、法師はその經を持って来れましたか」と。僧(仏陀波利)は(答えて)言った、「貧道は(文殊菩薩に)礼調りしようと思つ直ぐに来ましたので、(その)經を持って来ていません」と。老人は言った、「經も持たずに手ぶらで来たのなら、何の利益がありましようか。(それでは)たとえ文殊(菩薩)にお目にかかれたとしても、必ずしも(その方が文殊菩薩だと)分らないでしよう。師が西國に倒向して、その經を取つて来て漢土に流伝えることができるならば、(それが)とりもなおさず遍く衆もろの(優れた)聖がたに奉えして、広く群生に利益をあたえ、幽と明とを(共に)拯濟つて諸仏の恩に報いることなのです。師が經を取つてここにやつて来たならば、弟子がきつと師に文殊師利菩薩の所在をお教えしましょう」と。僧(仏陀波利)はその語を聞いて喜躍に勝えず、悲涙を裁抑え至心めて敬礼した。「そして」頭を(下げて)挙げる(少しの間)に、忽然として老人(の姿)は見えなくなつた。その僧(仏陀波利)はますます驚愕し、更に敬虔な心になり、(その老人に対し)繫念に誠を傾せた。「それから、その僧(仏陀波利)は」西國に迴還つて『仏頂尊勝陀羅尼經』を手に入れ、永淳二年(六八三)になつて西京(長安)に迴至り、具にこれまでの事を大帝に聞奏した。そこで大帝はその『仏頂尊勝陀羅尼經』の梵本を持って入内させ、日照三藏法師に請し、及び司賓寺典客令(賓客接待事務官)であつた杜行顛等に勅して、共にその經を(中國語に翻)訳させた。「そして」僧(仏陀波利)に(經本の代価として)絹三十匹を(布)施し、その經本を宮内から出すことを禁じた。その僧(仏陀波利)は悲泣て奏上して言つ

た、「貧道が軀を捐て命を委てて遠くから經を取つて来ましたのは、普く群生を済い苦難から救抜したいと情から望んだからです。財宝や名利〔を求めること〕など〔まったく〕念懐にありません。どうか經本をお返し下さい〔中国全土に〕流行らせて、含靈が共に利益をえられますようお願い致します」と。そこで帝は翻〔訳〕ができた〔中国語の〕經を〔宮中に〕留めて、「原本である」梵本を僧〔仏陀波利〕に返した。その僧〔仏陀波利〕は手に入れた梵本を持って〔長安の〕西明寺に向かい、梵語に長けた順貞という中国僧を訪ね当て、「皇帝に」奏上して共に翻譯しようとした。帝はその請に随つた。そこで僧〔仏陀波利〕は、もろもろの大徳の手を借りることなく、順貞と共に翻譯してしまつた。〔その後〕僧〔仏陀波利〕は、梵本を持って五臺山に向かい、山に入つて今にいたるまで〔山を〕出ていない。現在、「〔仏頂尊勝陀羅尼經〕は」前後〔二回〕翻譯された二種類の本が並に世間に流行している。〔二種類の本は〕語に少々同じでないところがあるが、どうか怪しまないでほしい。垂拱三年〔六八七〕になつて、定覺寺の主僧である志靜が、神都〔長安〕の魏国東寺に停在したときに、親しく日照三藏法師にお目にかかり、その〔仏陀波利という僧が長安に〕逗留〔した時のこと〕を質問したが、「その答えは」まったく上に説いた通りであつた。志靜はとうとう〔日照〕三藏法師に就いて「〔仏頂尊勝陀羅尼經〕の」神呪について諮受うことにした。〔日照〕法師はそこで梵音を口にだして宣え、二七〔十四〕日をかけて一句一句委さに授けたので、「志靜は」梵音を具足て、まったく差失がなくなつた。なお更に旧し翻譯した梵本を取りだして校勘し、あらゆる脱字や誤字について、すべて改定した。〔「仏頂尊勝陀羅尼經」所載の〕その呪の初め〔の部分〕に注して「最後に別に翻した」とあるのがそれである。その呪の〔字〕句は令であつた杜〔行顛〕が翻したものとや異なるが、その新しい呪の方が改定してあるから錯つていないし、「また」併せてその〔漢字の発〕音について〔きちんとした〕注記をつけてしまつている。後〔世〕に〔この呪を〕学ぶ者は、どうかこのことを詳かに〔知つて〕いてもらいたい。永昌元年〔六八九〕八月になつて、大敬愛寺において西明寺の上座である澄法師にお会いして、その〔仏

陀波利という僧が長安に逗留〔した時のこと〕を質問したが、これまた前に説いた通りであった。その経を翻訳した僧である順貞は、現在、西明寺に住している。この経が幽〔の者も〕顯〔の者もすべて〕を救拔する〔ことが出来る〕不可思議さについて、「仏教を」学ぶ者が知らないのが心配なので、具に委細〔すべて〕を〔記〕録して、まだ〔よく〕悟っていないものに伝えるものである。

### 【注】

- (1) 仏陀波利 中国名は覺護。北インド罽賓国の人。訳経僧であるが、その訳出した經典は『仏頂尊勝陀羅尼經』のみである。その伝は『宋高僧伝』卷二 (T50-717c)・『開元釈経録』卷九 (T55-565a) に見える。
- (2) 日照三藏法師 中インド出身の地婆訶羅のこと。中国名は日照。『大乘顯識經』『大乘五蘊論』など十八部の経論を訳出している。彼は杜行顛の後に今一度、勅命でこの経を訳出したと言われ、その『仏頂最勝陀羅尼經』は大正藏第一九冊 (No. 969) に収載されている。その伝は『宋高僧伝』卷二 (T50-719a)・『開元釈経録』卷九 (T55-564a) に見える。
- (3) 司賓寺典客令杜行顛等 杜行顛は京兆の人。儀鳳年間に「朝散郎行鴻臚寺典客署令」に任じられた人物で、蕃語や天竺語にも通じ、文藻も備えていたと言われる。杜行顛が訳出した『仏頂尊勝陀羅尼經』一卷は大正藏第一九冊 (No. 969) に収載されている。その伝は『開元釈経録』卷九 (T55-564a) に見える。
- (4) 西明寺 唐の高宗がインドの祇園精舎の制に模して、三年半の年月を費やして顯慶三年 (六五八) に長安の都に勅建した大寺院。『望月』第三冊 p.1428・『仏光』p.2577 参照)
- (5) 定覺寺主僧志靜 寺名、僧名ともに未詳。定覺寺は長安にあった寺であろう。

(6) 神都魏国東寺 神都は京畿のこと、ここでは長安を指す。魏国東寺は咸亨元年(六七〇)に長安に建てられた太原寺のことで、この寺は建立後、魏国西寺、崇福寺、魏国東寺、大周東寺などと次々に改名されている。菩提流支が『大宝積経』や四十卷『華嚴経』を訳出した寺である。『仏光』p.1373 参照。

(7) 其呪初注云最後別翻者是也 原本および高麗本にはこの注は付されていないが、宋本・明本・黄檗本には呪の前の「即説呪曰」という経文の下に「此呪最後別翻」という夾註がある。

(8) 大敬愛寺 長安に在った寺院。『仏光』p.2209の「印宗」の項参照。

## 〔2〕善任天子の因縁

【原文】

仏頂尊勝陀羅尼経

罽賓国沙門仏陀波利奉 詔訳

如是我聞。一時薄伽梵在室羅筏、住誓多林給孤獨園、与大苾芻衆千二百五十人俱。又与諸大菩薩僧万二千人俱。爾時三十三天於善法堂会、有一天子名曰善任。与諸大天遊於園觀。

【書き下し】

仏頂尊勝陀羅尼経

罽賓国<sup>(10)</sup>の沙門仏陀波利<sup>(1)</sup>、詔を奉じて訳

是くの如く我聞く。一時、薄伽梵<sup>(11)</sup>室羅筏<sup>(12)</sup>に在して、誓多林<sup>(13)</sup>の給孤獨園<sup>(14)</sup>に住し、大苾芻衆<sup>(15)</sup>千二百五十人と俱なりき、又た諸大菩薩僧<sup>(16)</sup>万二千人と俱なりき。爾の時<sup>(17)</sup>三十三天の善法堂会<sup>(18)</sup>に於いて、一天子有り名づけて善任<sup>(19)</sup>と曰う。諸もろの大天と

又与大天受勝尊貴。与諸天女前後圍繞、歡喜遊戯種種音樂共相娛樂受諸快樂。

爾時善住天子即於夜分聞有聲言。善住天子却後七日命將欲尽。命終之後生臆部洲。受七返畜生身。即受地獄苦。從地獄出希得人身生於貧賤。處於母胎即無兩目。

爾時善住天子聞此声已。即大驚怖身毛皆豎愁憂不樂。速疾往詣天帝釈所、悲啼號哭惶怖無計。頂礼帝釈二足尊已、白帝釈言聽我所説。我与諸天女共相圍繞受諸快樂。聞有聲言善住天子却後七日命將欲尽。命終之後生臆部洲。七返受畜生身、受七身已即墮諸地獄。從地獄出希得人身。生貧賤家而無兩目。天帝云何令我得免斯苦

与に圍繞おんかんに遊び、又た大天と与に勝尊貴じやうを受け、諸もろの天女の前後圍繞おんかんすると与に歡喜遊戯し、種種の音楽もて共に相娛樂し、諸もろの快樂を受く。

爾その時、善住天子即ち夜分に於いて声の言うこと有るを聞く。「善住天子よ、却後七日にして命將に尽きんと欲す。命終わりの後、臆部洲おそぶしゆうに生じ、七返畜生の身を受け、即ち地獄の苦を受け、地獄より出でて希に人身を得て貧賤に生ずるも、母胎に処して即ち兩目無からん」と。

爾その時、善住天子、此の声を聞き已わつて、即ち大いに驚怖して身毛皆な豎ち、愁憂して榮しませず。速疾すみぢかに天帝釈の所に往詣して、悲啼號哭ひていごうこくし、惶怖こうふするも計無し。帝釈の二足の尊を頂礼し已わつて、帝釈に白して言う、「我が所説を聽きけ。我、諸もろの天女の共に相圍繞すると与に諸もろの快樂を受くるに、声の言うこと有るを聞く、『善住天子よ、却後七日にして命將に尽きんと欲す。命終わりの後、臆部洲おそぶしゆうに生じて、七返畜生の身を受け、七身を受け已わつて、即ち諸もろの地獄に墮し、地獄より出でて希に人身を得るも、貧賤の家に生じて、兩目無からん』と。天帝、云何いかんが我をして斯この苦を免まひることを得せしめん」と。

爾時帝釈聞善住天子語已、甚大驚愕即自思惟。此善住天子受何七返惡道之身。爾時帝釈須臾靜住入定諦觀、即見善住当受七返惡道之身。所謂猪狗野干獼猴蟒蛇烏鷲等身。食諸穢惡不淨之物。爾時帝釈觀見善住天子当墮七返惡道之身。拯助苦惱痛割於心。諦思無計何所歸依。唯有如來應正等覺。令其善住得免斯苦

爾時帝釈即於此日初夜分時。以種種花鬘塗香末香。以妙天衣莊嚴執持往詣誓多林園於世尊所到已頂礼仏足右繞七匝。即於仏前廣大供養。仏前胡跪而白仏言。世尊善住天子云何当受七返畜生惡道之身。具如上説

爾の時、帝釈、善住天子の語を聞き已わり、甚だ大いに驚愕して即ち自ら思惟すらく、「此の善住天子、何をもつてか七返惡道の身を受けん」と。爾の時、帝釈須臾にして靜住し、定に入りて諦かに觀するに、即ち見る善住当に七返惡道の身を受くべきことを。所謂猪、狗、野干、獼猴、蟒蛇、烏、鷲等の身にして、諸もろの穢惡不淨の物を食う。爾の時、帝釈、善住天子の当に七返惡道の身に墮すべきことを觀見し、苦惱を拯助せんとし、心を痛割して、諦に思うも計無し。「何れの所にか歸依せん。唯だ如來・應・正等覺有りて、其の善住をして斯の苦を免かることを得せしめん」と。

爾の時、帝釈即ち此の日の初夜分の時に於て、種種の花鬘、塗香、末香を以て、「また」妙天衣の莊嚴を以て執持し、誓多林園に往詣して世尊の所へ到り已わつて仏足を頂礼し、右繞すること七匝す。即ち仏前に於いて廣大に供養し、仏の前に胡跪して仏に白して言う。「世尊よ、善住天子は云何が當に七返の畜生惡道の身を受くべきや」と。具に上に説くが如し。

【校注】

- (一) 国Ⅱ原本に無し。大正蔵本に拠つて補う。  
 (二) 極Ⅱ大正蔵本は「極」に作る。「尊勝陀羅尼經疏」、「尊勝陀羅尼經鈔」は「拯」に作る。  
 (三) 帛Ⅱ大正蔵本は「匣」に作る。

【口語訳】

仏の頂〔から放たれた光によつて説かれた〕尊勝陀羅尼の經典

カシュミールの沙門である仏陀波利、詔を奉じて訳す

このようにわたしは聞いた。ある時、薄伽梵は室羅筏(舍衛国)におられ、祇園精舎に住まられて、立派な修行僧たち千二百五十人と一緒であり、また諸もろの立派な菩薩たち一万二千人と一緒であつた。その時〔須弥山の頂上である〕三十三天にある善法堂に、善住という名の天子がいた。〔帝釈天を初めとする三十三天の〕諸もろの立派な天子たちと共に〔天上の〕園に遊び、また〔諸もろの〕立派な天子たちと共に非常に尊貴を受けて、前後を圍繞んでゐる天女たちと共に歡喜遊戯び、種々の音楽をききながら娯樂み、諸もろの快樂を受けていた。ある時、善住天子は夜分に〔次の様に〕言う声を聞いた。「善住天子よ、〔あなたは〕これから七日後に壽命が尽きてしまいます。命が終わつた後、贍部洲に七回、畜生の身〔を受けて〕生まれ、それから地獄〔に墮ちて、その〕苦しみを受け、地獄より出て希いに人の身を得ますが、貧賤〔身分〕に生まれ、母胎に処つても両目が無いでしょう」と。

その時、善住天子はこの声を聞きおわつて、大變驚怖て身の毛が皆な豎ち、愁憂して樂しめなかつた。すぐ



さま帝釈天の所に往詣いて、悲啼號哭み、惶怖るだけでどうしようもなかった。帝釈〔天〕の尊い二本の〔足に〕頂礼いて、帝釈〔天〕に申し上げた、「わたしの所説をお聴きください。わたしが、「わたしを」いっしよに圍繞んでいる天女たちと共に諸もろの快樂を受けていますと、「次ぎの様に」言う声が聞こえました。善住天子よ、「あなたは」これから七日後に、寿命が尽きてしまいます。命が終わった後に、瞻部洲に生まれて、七回、畜生の身を受けて〔生まれ〕、七〔回畜生の〕身を受けてしまつて、それから諸もろの地獄に墮ち、地獄から出て、希いに人の身を得ますが、貧賤〔身分〕の家に生まれて、両目が無いでしょう」と。天帝よ、どうやつたらこの苦しみから免れることができましようか」と。

その時、帝釈〔天〕は善住天子の語を聞きおわつて、非常に驚愕いて、「次の様に」思惟えた、「この善住天子は、どうして七回も悪道の身を受けなければならぬのか」と。その時、帝釈〔天〕は須臾静かに住り、「禪」定に入つて諦かに観てみて、善住が七回悪道の身を受けなければならぬことを見た。いわゆる猪、狗、野干、彌猴、蟒蛇、烏、鷲といった身で、諸もろの穢悪た不浄の物を食べていた。その時、帝釈〔天〕は善住天子が七回悪道の身に墮ちなければならぬことを観見て、「善住天子の」苦惱を拯助おうと、心を痛割し、諦思えたがうまい計が無かつた。「そこで次の様に考えた、」何所に帰依すればよいであろうか。ただ如来・応供・正等覺〔と呼ばれる世尊〕だけが、その善住〔天子〕をこの苦しみから免れさせることができるだろう」と。

その時、帝釈〔天〕はこの日の初夜分の時に、種種な花鬘や塗香や抹香、「さらには」妙天の莊嚴な衣を〔手に〕執持て、誓多林〔にある給孤独〕園に往詣き世尊の所へ到着しおわつて、仏の〔御〕足を頂礼き、「仏に右肩を向けて」右に七回廻つた。そして仏前で広大に供養し、仏の前に右膝を地につけてすわり、仏に白しあげて言つた、「世尊よ、善住天子はどうして七回も悪道である畜生の身を受けなければならないのでしょうか」と。〔統けて〕具に上に説いたように〔申し上げた〕。

【注】

- (9) 仏頂尊勝 || または尊勝仏頂という。仏頂とは仏の頭上のこと、如来の無見頂相の諸仏の中で最も尊く最も勝れた尊をいう。
- (10) 闍賓国 || 西北インドの古い国。カシュミールのこと。
- (11) 薄伽梵 || 世尊。釈尊のこと。bhagavat の音写。
- (12) 室羅筏 || 舍衛国のこと。śrāvastī の訳。仏陀在世の頃に中インドにあった国。
- (13) 誓多林給孤獨園 || 祇園精舎 (祇園精舎) のこと。中インドのサーヴァッティー国にあった精舎。スタッタ長者が、釈尊とその教団のために建てた僧坊。ジェータ太子の林苑に建てられたので祇園という。多くの説法が、この地でなされた。〔『中村』p.217〕
- (14) 苾芻 || bhikṣu (托鉢乞食する者) の音写。新しい音写で、古くは比丘と音写した。〔『中村』p.1139〕
- (15) 菩薩僧 || ①菩薩の集まり。②二種僧の一つ。在家のすがたをした僧。〔『中村』p.1221〕とあるがここでは①の意味をとる。
- (16) 三十三天 || 六欲天の一つ。須弥山の頂上にある天。中央に帝釈天がいて、頂の四方に各八人の天人がいるので、合わせて三十三天となる。切利天ともいう。〔『中村』p.472〕
- (17) 善法堂 || 帝釈天の宮殿。切利天 (三十三天) にある講堂 (ホール)。須弥山の頂上である喜見城外の西南角にある。諸天がここに集まって人中の善悪を議論するという。〔『中村』p.852〕
- (18) 善住 || 善法堂のある天に住む天人であることから善住とよばれる。また乾闥婆の児を善住といい、その容貌は端嚴で髮型衣服冠なども含めて菩薩のようである。〔『尊勝陀羅尼經疏』737・192b-193b、『尊勝陀羅尼經鈔』8b-9a〕
- (19) 諸大天 || 帝釈天と三十二天のこと。〔『尊勝陀羅尼經鈔』9a-10b〕
- (20) 園觀 || ①園は園林、観は高台のこと。②園のこと。教団の敷地をさす。③園のみいとなさま。〔『中村』p.139〕

- (21) 尊貴Ⅱ尊く勢いのあること。〔『中村』p.862〕
- (22) 围绕Ⅱとり囲むこと。〔『中村』p.40〕
- (23) 瞻部洲Ⅱ閻浮提に同じ。インドのこと。須弥山の周囲に四洲があり、その中で南方にある洲をさす。ここで住民が受ける楽しみは東と北の二洲には劣るが、諸仏が現われるのはこの南の洲だけであるという。〔『中村』p.842、同p.121〕
- (24) 須臾Ⅱ①時間の単位。三十ラヴァをいう。刹那と同視されることがある。②転じて短時間のこと。瞬時。一時。たちまちの間。わずかの間。つかの間。しばし。しばらく。mahur〔『中村』p.629〕、こつでは②の意味をとる。
- (25) 野干Ⅱ野ぎつねのこと。狼の一種ともいう。夜に出歩いて人肉を食う。〔『中村』p.1374〕
- (26) 彌猴Ⅱサンスクリット makara の漢訳。猿。大ざる。猿は性質が軽はずみで落ち着かぬものであるが、それを、凡夫の五欲の盛んで不安定なさまにたとえる。〔『中村』p.1296〕
- (27) 蟒Ⅱ大きなうわばみ、の意。大腹・質朴・非人・大胸復行などとも漢訳する。〔『中村』p.1365〕
- (28) 如来正等覚Ⅱ如来と応と正等覚。応は応供の略。人天（人びとと神々）の供養を受けるにたる者の意。正等覚は正しい完全なさとりの意。仏の十号のうちの第一と第二と第三。正等覚は正遍知ともいう。〔『中村』p.132〕
- (29) 初夜Ⅱインドでは一夜を初・中・後に三分するのが例である。そのうち初夜は宵の口を意味する。今の午後六時ごろから九時ごろまでのこと。初更。夜の最初の部分。〔『中村』p.680〕
- (30) 花鬘Ⅱ華には「花」、鬘には「綬」「幔」をも当てる。糸で生花を綴り、またはこれを結んで、頸飾りまたは身の装飾となし、あるいは仏の供養に用いる。
- (31) 塗香末香Ⅱ香を薫じたり、身に塗ったりして、悪臭を取り除き芳香を生活の中に漂わすインド古来の習俗が、仏の供養に取り入れられたことにより、香は供養の重要な料となった。沈香・白檀・丁香香など数多くの南方産のものが用いられている。身に塗るものを「塗香」といい、香水・香油・香薬などに分かれ、たくものを「薫香・焼香」といい、

丸香・抹香・練香・線香などに加工される。

(32) 妙天衣 妙はすばらしい、最勝の意味で、天衣とは立派な衣の意味。よつて最上の衣。

(33) 執持 心にしっかりと刻みつけること。信仰心や精神統一した心が確固として散乱しないこと。〔中村』p.649〕

(34) 頂礼 古代インドにおける最高の敬礼法で、尊者の足下にひれ伏し、頭の先を地につける。仏教でも仏の両足に頭をつけるのを「頂礼仏足」といい、両手両足頭を地につける五体投地は最上の敬礼法とされる。

(35) 右繞 右邊とも書き、「右旋」ともいう。インドの礼法の一つ。敬意を示したい対象（貴人・聖火など）に右肩を向け、その周囲を右回りに廻る礼。これが仏教にも取り入れられて、「右邊三匝」（右回りを三回繰り返すこと）の礼法が、  
般化した。

(36) 胡跪 足をかがめて右膝を地につけること。インドの礼法。〔中村』p.348〕

### 〔3〕陀羅尼の教示

【原文】

爾時如来頂上放種種光、遍滿十方一切世界  
已。其光還來繞仏三市、從仏口入。仏便微笑

【書き下し】

爾の時如来、頂上より種種の光を放ち、十方一切世界に遍  
満し已われり。其の光還り来りて仏を繞ること三市し、仏の

告帝釈言、天帝、有陀羅尼、名為如來<sup>(1)</sup> 頂尊勝。能淨一切惡道、能淨除一切生死苦惱、又能淨除諸地獄閻羅王界畜生之苦、又破一切地獄能迴向善道。天帝、此頂尊勝陀羅尼、若有人聞、一經於耳、先世所造一切地獄惡業、皆悉消滅、當得清淨之身。隨所生處憶持不忘、從一仏刹至一仏刹、從一天界至一天界、遍歷三十三天。所生之處、憶持不忘。天帝、若人命欲將終、須臾憶念此陀羅尼、還得增壽、得身口意淨、身無苦痛、隨其福利隨處安隱。一切如來之所觀視、一切天神恒常待衛、為人所敬、惡障消滅、一切菩薩同心覆護。天帝、若人能須臾誦誦此陀羅尼者、此人所有一切地獄畜生閻羅王界餓鬼之苦、破壞消滅無有遺余。諸仏刹土及諸天宮、一切菩薩所住之門、無有障礙、隨意遊入。爾時帝釈白仏言、世尊唯願如來、為衆生說增益壽命之法。爾時世尊知帝釈意心之所念樂聞仏説是陀羅尼法、即説呪曰、

口より入る。仏便ち微笑して帝釈に告げて言く、「天帝よ、陀羅尼有り名づけて如來頂尊勝と為す。能く一切の惡道を淨め、能く一切の生死の苦惱を淨め除き、又た能く諸もろの地獄・閻羅王界・畜生の苦を淨め除き、又た一切の地獄を破りて能く善道に迴向す。天帝よ、此の頂尊勝陀羅尼は、若し人の聞く有りて、一たび耳を経ば、先世に造る所の一切の地獄の惡業は皆悉く消滅し、當に清淨の身を得、所生の處に隨いて憶持して忘れざるべし。一仏刹より一仏刹に至り、一天界より一天界に至り、三十三天を遍歷して、所生の處に憶持して忘れず。天帝よ、若し人の命將に終わらんと欲するに、須臾に此の陀羅尼を憶念せば、還つて壽を益すを得、身口意淨らかなることを得て、身に苦痛無く、其の福利に隨いて隨いて安隱ならん。一切の如來に觀視せられ、一切の天神恒常に待衛し、人の敬う所となり、惡障消滅して、一切の菩薩同心に覆護せん。天帝よ、若し人能く須臾も此の陀羅尼を誦誦せば、此の人の所有一切の地獄・畜生・閻羅王界・餓鬼の苦、破壞消滅して遺余有ること無からん。諸もろの仏刹土及び諸もろの天宮、一切の菩薩の住む所の門、障礙有ること無く、随意に遊入せん」と。

爾の時帝釈、仏に白して言く、「世尊よ、唯だ願わくは如来よ、衆生の為に寿命を増益するの法を説きたまえ」と。爾の時世尊、帝釈の意心の念ずる所に仏の是の陀羅尼の法を説くを聞かんと樂うを知り、即ち呪を説いて曰く、

那謨薄伽跋帝(一)啼隸路迦囉囉底毗失瑟吒  
 (引、拆法反、下同)耶(二)勃陀(引)耶(三)薄伽跋帝(四)  
 怛姪他(五)唵(引、六)毗輸駄耶(七)娑摩三漫多  
 囉婆娑(八)娑破囉拏揭底伽訶那娑婆(引)囉輸  
 地(九)阿鼻誑者蘇揭多伐折(時設反、下同)那阿蜜  
 唎多毗囉雞(下、此取闕字呼喚)阿(引)訶羅阿訶  
 羅(十二)阿(引)瑜散陀(引)羅尼(十二)輸駄耶輸  
 駄耶(十三)伽伽那毗輸(輸律反下同)提(十四)烏瑟  
 尼沙毗逝耶輸提(十五)娑訶娑囉喝囉濕弭珊珠  
 地帝(十六)薩(引)婆怛他揭多地瑟吒(引)那頰地  
 瑟恥帝慕姪隸(十七)拔折囉迦(引)耶僧訶多那  
 輸提(十八)薩婆伐囉拏毗輸提(十九)囉囉底你伐  
 怛耶阿瑜輸提(二十)薩末那頰地瑟恥帝(廿)末  
 你末你(廿一)怛闍多部多俱胝鉢唎輸提(廿二)毗

那謨薄伽跋帝(一)啼隸路迦囉囉底毗失瑟吒(引、拆と法の反(タ)と読む。下同)耶(二)勃陀(引)耶(三)薄伽跋帝(四)怛姪他(五)唵(引)六)毗輸駄耶(七)娑摩三漫多囉婆娑(八)娑破囉拏揭底伽訶那娑婆(引)囉輸地(九)阿鼻誑者蘇揭多伐折(時と設の反(シヤ)と読む。下同)那阿蜜唎多毗囉雞(下、此は闕の字の呼声を取つて喚む)阿(引)訶羅阿訶羅(十二)阿(引)瑜散陀(引)羅尼(十二)輸駄耶輸駄耶(十三)伽伽那毗輸(輸と律の反(シユ)と読む。下同)提(十四)烏瑟尼沙毗逝耶輸提(十五)娑訶娑囉喝囉濕弭珊珠地帝(十六)薩(引)婆怛他揭多地瑟吒(引)七)那頰地瑟恥帝慕姪隸(十七)拔折囉迦(引)耶僧訶多那輸提(十八)薩婆伐囉拏毗輸提(十九)囉囉底你伐怛耶阿瑜輸提(廿)薩末那頰地瑟恥帝(廿一)末你末你(廿二)怛闍多部多俱胝鉢唎輸提(廿三)毗薩普吒勃地輸提(廿四)社耶社耶(廿五)毗社耶毗社耶(廿六)薩末囉薩末囉勃陀頰地瑟恥多輸提(廿七)跋折囉跋折囉揭鞞(廿八)跋折藍婆伐都(廿九)麼麼(某甲)呪文を受持している

薩普吒勃地輸提(廿四)社耶社耶(廿五)毗社耶毗社耶(廿六)薩末囉薩末囉勃陀頰地瑟恥多輸提(廿七)跋折嚩跋折囉揭鞞(廿八)跋折藍婆伐都(廿九)麼麼(某甲(ハ)受持者於此自稱名)薩婆薩埵那(上一)迦(引)耶毗輸提(卅)薩婆揭底鉢喇輸提(卅二)薩婆怛他揭多三摩濕婆娑頰地瑟恥帝(卅三)勃囉勃囉(卅四)他耶反)蒲駄耶蒲駄耶三漫多鉢喇輸提(卅四)薩婆怛他揭多地瑟吒(引)那頰地瑟恥帝(卅五)娑婆訶

仏告帝釈言、此呪名淨除一切惡道仏頂尊勝陀羅尼。能除一切罪業等障、能破一切穢惡道苦。天帝、此陀羅尼、八十八苑伽沙俱胝百千諸仏同共宣説、隨喜受持。大如來智印印之、為破一切衆生穢、惡道苦故。為一切地獄畜生閻羅王界衆生得解脫故。臨急苦難墮生死海中衆生得解脫故。短命薄福無救護衆生、棄造雜染惡業衆生故説。又此陀羅尼於瞻部洲住持力故。能令地獄惡道衆生、種種流転生死薄福衆

者の名前をこゝで叫ぶる(一)薩婆薩埵那(二)迦(引)耶毗輸提(卅)薩婆揭底鉢喇輸提(卅二)薩婆怛他揭多三摩濕婆娑頰地瑟恥帝(卅三)勃囉勃囉(卅四)他と耶の反(タ)と読む(五)蒲駄耶蒲駄耶三漫多鉢喇輸提(卅四)薩婆怛他揭多地瑟吒(引)那頰地瑟恥帝(卅五)娑婆訶

仏、帝釈に告げて言く、「此の呪は『淨除一切惡道仏頂尊勝陀羅尼』と名づく。能く一切の罪業等の障を除き、能く一切の穢、惡道の苦を破る。天帝よ、此の陀羅尼は、八十八苑伽沙俱胝百千の諸仏、同共に宣説し、隨喜受持す。大如來の智印もて之を印するは、一切の衆生の穢・惡道の苦を破らんが為の故に。一切の地獄・畜生・閻羅王界の衆生をして解脫を得せしめんが為の故に。急なる苦難に臨んで生死海中に墮する衆生をして解脫を得せしむるが故に。短命薄福にして救護無き衆生、棄つて雜染の惡業を造る衆生

生、不信善惡業失正道衆生等、得解脫義故。

の故に説く。又た此の陀羅尼は贍部洲せんぶしゅう<sup>23</sup>に於いて住持する力の故に、能く地獄惡道の衆生、種種に生死を流転せる薄福なる衆生、善惡業を信ぜずして正道を失える衆生等をして、解脫の義を得せしむる故に」と。

【校注】

- (一) 巾ニ大正藏本は「匝」に作る。
- (二) 仏頂尊勝ニ原本は「仏尊勝頂」に作る。
- (三) 天帝ニ黄檗本はこの上に「仏告」の二字あり。
- (四) 悉皆ニ大正藏本は「悉皆」に作る。
- (五) 滅ニ黄檗本は「除」に作る。
- (六) 遊ニ大正藏本は「趣」に作る。
- (七) 心ニ黄檗本は無し。
- (八) 那謨：ニ以下の陀羅尼の部分は、底本と磧砂藏本・大正藏本と大きく内容を異にしているため、今回は異同の校注を行わなかつた。
- (九) 陀羅尼ニ大正藏本は「大陀羅尼」に作る。



- (一〇) 大如来Ⅱ大正藏本は「大日如来」に作る。  
(一一) 苦Ⅱ原本、宋磧砂本は「義」に作る。  
(一二) 故説Ⅱ大正藏本は「得饒益故」に作る。

【口語訳】

その時、如来は頭頂から種々の光を放ち、それはあらゆる世界をすべて満たし尽くした。そしてその光は返ってきて仏のまわりを三回めぐった後、仏の口から入った。そこで仏は微笑して帝釈〔天〕に言った、「天帝よ、『如来仏頂尊勝』という名の陀羅尼がある。これは〔地獄・餓鬼・畜生という〕すべての悪道を浄め、すべての生死の苦悩を除き、地獄や閻魔王の世界〔に属する餓鬼や人間〕、畜生の苦しみを浄め除き、すべての地獄を破つて善い世界に向かわせる。また天帝よ、この『仏頂尊勝陀羅尼』が聞こえて、少しでも耳にする者があれば、前世で作った地獄に陥る〔原因となる〕すべての悪業は残らず消滅し、清浄なる身を得られるだろう。生まれ〔変わ〕る先々の処でしつかりと覚えていて忘れないだろう。〔一つの〕仏国土から別の仏国土に至り、天上界から別の天上界に至り、三十三の天界を遍歴して、生まれ〔変わ〕る先々の処でしつかりと覚えていて忘れないだろう。天帝よ、もし寿命がまさに尽きようとしている人がいた場合、僅かな時間でもこの陀羅尼を憶念えれば、寿命を延ばすことができるだろう。〔また〕身も口も意も清らかになり、身に苦痛は無く、その〔憶念える〕福利に従い、その場その場で安穩となろう。すべての如来に見守られ、すべての神々が常に近くで守り、人々に敬われて、悪い障害は消滅し、すべての菩薩は心を同じくして囲み守るであろう。天帝よ、もし少しでもこの陀羅尼を読

誦する人があれば、あらゆるすべての地獄・畜生や閻魔王世界に〔属する〕餓鬼の苦しみが破壊され、消滅して跡形さえ残らないだろう。もろもろの仏国土せかい、神々の宮殿、すべての菩薩が住する場所の入り口から、何のさまたげもなく自由に入入りできるだろう」。

その時、帝釈（天）は仏に申し上げた、「世尊よ、どうか如来よ、衆生のために寿命を増益ふやす法をお説き下さい」。その時世尊は、帝釈（天）が心の中でこの陀羅尼おしえの法について説き〔示す〕のを聞きたいと願っていることを知り、すぐに〔次のような〕呪を説いて言った。

《以下、陀羅尼の口語訳は、竹中智泰氏の訳文を転載させて頂いた。》

〔原載、木村俊彦・竹中智泰共著『禪宗の陀羅尼』（大東出版社・一九九八）

世尊〔すなわち、十方〕三世において最も勝れた仏陀世尊に帰依いたします。すなわち、オーン。浄めたまえ、浄めたまえ。全く平等にして遍く周く遍在する光明の輝き（拡がり）によって、六道の奥底（苦惱）〔までも照らす〕本性の清浄なるものよ。善逝（仏陀）の殊妙なる言葉という甘露水の灌頂〔すなわち〕偉大なる真言の諸句によって、私を灌頂したまえ。与えたまえ、与えたまえ、〔更に寿命を〕。寿命を保持するものよ。浄めたまえ、浄めたまえ。虚空の如く〔本性の〕清浄なるものよ。清浄なる仏頂尊勝尊よ。千の光明によつて鼓舞されしものよ。一切の如来（仏）を直視するものよ。六波羅蜜を完遂せしものよ。一切の如来の本質である加護〔の不可思議力〕によつて加護されしものよ。〔一切の如来の悟境・功德・誓願をあらわす〕偉大なる印相よ。金剛身（金剛杵のごとき不壊なる身体）を備えたる清浄なるものよ。一切の障害・恐怖・〔三〕悪道〔において〕清浄なるものよ。〔衆生済度をする仏の〕誓願によつて加護されしものよ。宝珠よ、宝珠よ、大宝珠よ。真如（ありのままであること）真実（實際（極限的真理））によつて清浄なるものよ。開顯したる覚知によつ

て清浄なるものよ。勝利したまえ、勝利したまえ。大いに勝利したまえ、大いに勝利したまえ。憶念したまえ、憶念したまえ。一切の諸仏に加護されし清浄なるものよ。金剛よ。金剛を胎とするものよ。私と一切の生きとし生けるものの身体は金剛となれよかし。身体の完全に清浄なるものよ。一切趣〔六道〕において完全に清浄なるものよ。しかして、一切の如来は私に安樂を与えたまえ。一切の如来の安慰によりて加護されしものよ。悟りたまえ、悟りたまえ。よく悟りたまえ、よく悟りたまえ。悟らせたまえ、悟らせたまえ。よく悟らせたまえ、よく悟らせたまえ。遍満する〔光明によりて〕清浄なるものよ。一切の如来の本質である加護〔の不可思議力〕によりて加護されし、偉大なる印相よ。スヴァーハー（めでたし）。

仏は帝釈〔天〕に言った、「この呪は『淨除一切惡道仏頂尊勝陀羅尼』と名付けられ、すべての罪業などによる障害を除き、すべての穢れと〔三〕惡道の苦しみを滅するであろう。天帝よ、この陀羅尼は数え切れないほど多くの諸仏が共に広く説き示し、隨喜して受持っているものである。偉大な如来が智印によつてこれを証するのは、すべての衆生の穢れや〔三〕惡道の苦しみを破らせるためであり、すべての地獄や畜生、閻魔王世界〔に属する餓鬼や人間世界〕の衆生に解脱を得させるためであり、急な苦難にであつて生死の海に落ち込んだ衆生に解脱を得させるためであり、短命で福が少なく、救護つてくれるものない衆生と、有漏の惡業を進んで造つている衆生に利益を得させるためである。また、この陀羅尼はこの瞻部洲で住つ（ことによつて得られる、すばらしい）力があるから、地獄〔などの〕惡道〔に墮ちている〕衆生や、生死〔の世界〕を流転している福の少ない衆生や、善惡業〔の道理〕を信じないで正しい道を見失つている衆生たちにも、解脱の義をわからせることができるのである」。

【注】

- (37) 十方十の方向。東・西・南・北・北東・南東・北西・南西・上・下。
- (38) 帝釈ニ帝釈天。インドラ神。ヴェーダ神話における最も有力な神であるが、後に仏教に取り入れられて、梵天とともに仏法を守護する神とされた。注(39)参照。
- (39) 天帝ニ神々の帝王。帝釈天。注(38)参照。
- (40) 陀羅尼ニ梵語 *dhāraṇī* の音写。仏の教えの要となるもので、神秘的な力を持つと信じられる呪文。
- (41) 悪道ニ悪事を為すことよって生まれる場所。善道の対。六道のうち、地獄道・餓鬼道・畜生道を三悪道という。悪趣と同義。
- (42) 閻羅王ニ閻魔大王。「閻羅」は梵語 *Yama-raja* の音写。死後の世界の支配者で、死者の罪を裁く地獄の主。冥界の王。
- (43) 善道ニ善行を為すことよって生まれる場所。悪道の対。天上界と人間界の二つをいう。
- (44) 廻向ニ振り向けること。方向を転じて向かわしめること。また、功德を他にめぐらし、差し向けること。
- (45) 仏刹ニ仏の国。仏国土。梵語 *buddha-kṣetra* の音写。
- (46) 天界ニ天上の世界。神なる世界。
- (47) 福利ニ福德と利益。功德。
- (48) 覆護ニ覆い守る。また、その守り手。
- (49) 増益ニ増やすこと。増大すること。また、無であるものを有であると誤認することもない。
- (50) 殃伽沙ニ殃伽はガンジス河。すなわち、ガンジス河の砂のように多いこと。数え切れないほど数が多いこと。
- (51) 俱胝ニ数の単位で、十の七乗。数え切れないさまを表すのにも用いる。
- (52) 穢悪ニけがらわしく、きたないこと。また、そのもの。

#### 〔4〕陀羅尼の功德

##### 【原文】

仏告天帝、我説此陀羅尼、付囑於汝。汝當授与善住天子。復当受持誦誦、思惟愛樂、憶念供養、於瞻部洲一切衆生、広為宣説此陀羅尼。亦為一切諸天子故、説此陀羅尼印、付囑於汝。天帝、汝当善持守護、勿令忘失。天帝、若人須臾得聞此陀羅尼、千劫已來積造惡業重障、応受種種流転生死、地獄餓鬼畜生、閻羅王界阿修羅身、夜叉羅刹鬼神、布单那羯吒布单那、阿波娑摩羅、蚊虻、龜狗、蟒蛇、一切諸鳥、及諸猛獸、一切蠢動含靈、乃至蟻子之身、更不重受、即得転生諸仏如來一生補処菩薩同会処生、或得大姓婆羅門家生、或得大刹利種家生、或得豪貴最勝家生。天帝、此人得如上貴処生者、皆由聞此陀羅尼故、転所生処

##### 【書き下し】

仏、天帝に告ぐ、「我、此の陀羅尼を説いて汝に付囑す。汝、當に善住天子に授与すべし。復た當に受持誦誦し、思惟愛樂し、憶念供養し、瞻部洲の一切衆生に於いて広く為に此の陀羅尼を宣説すべし。亦た一切諸天子の為の故に、此の陀羅尼印を説いて汝に付囑す。天帝よ、汝當に善持し守護して、忘失せしむること勿かるべし。天帝よ、若し人、須臾も此の陀羅尼を聞くことを得ば、千劫より已來た惡業重障を積造し、應に種種に生死に流転して、地獄、餓鬼、畜生、閻羅王界、阿修羅身、夜叉、羅刹、鬼神、布单那、羯吒布单那、阿波娑摩羅、蚊虻、龜狗、蟒蛇、一切諸もろの鳥、及び諸もろの猛獸、一切の蠢動含靈、乃至、蟻子の身を受くべきも、更に重ねて受けず、即ち転生して諸仏如來と一生補処の菩薩と同じ会処に生ずることを得、或いは大姓婆羅門の家に生ずることを得、或いは大刹利種の家に生ずることを得、或いは豪貴最

皆得清淨。天帝、乃至得到菩提道場最勝之處、皆由讚美此陀羅尼。功德如是。天帝、此陀羅尼名吉祥、能淨一切惡道。此仏頂尊勝陀羅尼、猶如日藏摩尼之寶、淨無瑕穢、淨等虛空、光焰照徹、無不周遍。若諸衆生持此陀羅尼、亦復如是。亦如閻浮檀金、明淨柔軟、令人喜見不為穢惡之所染著。天帝、若有衆生、持此陀羅尼、亦復如是。乘斯善淨、得生善道。天帝、此陀羅尼所在之處、若能書寫流通、受持誦誦、聽聞供養。能如是者、一切惡道、皆得清淨、一切地獄苦惱、悉皆消滅。

仏告天帝、若人能書寫此陀羅尼、安高幢上、或安高山、或安樓上、乃至安置窰堵波中、天帝、若有苾芻苾芻尼、優婆塞優婆夷、族姓男族姓女、於幢等上、或見、或與幢相近、其影

勝家に生ずることを得ん。天帝よ、此の人、如上の貴處の生を得るは、皆な此の陀羅尼を聞くに由るが故にして、転じて生ずる所の處は皆な清淨を得。天帝よ、乃至、菩提道場最勝の處に到ることを得るは、皆な此の陀羅尼を讚美するに由る。功德は是くの如し。天帝よ、此の陀羅尼を名づけて吉祥となす。能く一切の惡道を淨む。此の仏頂尊勝陀羅尼は猶お日藏摩尼の寶の、淨くして瑕穢無く、淨くして虛空と等しく、光焰照徹して周遍せざる無きが如し。若し諸もろの衆生、此の陀羅尼を持たば、亦復た是くの如し。亦た閻浮檀金の明淨柔軟にして、人をして喜んで見せしめ、穢惡の染著する所とならざるが如し。天帝よ、若し衆生有りて此の陀羅尼を持たば、亦復た是くの如し。斯の善淨に乗じて善道に生ずるを得ん。天帝よ、此の陀羅尼所在の處に、若し能く書寫流通し、受持誦誦し、聽聞供養せば、能く是くの如き者、一切の惡道は皆な清淨なることを得、一切の地獄の苦惱は悉く皆な消滅せん」と。

仏、天帝に告ぐ、「若し人、能く此の陀羅尼を書寫し、高幢の上に安じ、或いは高山に安じ、或いは樓上に安じ、乃至、窰堵波中に安置するに、天帝よ、若し苾芻・苾芻尼、優婆

映身、或風吹陀羅尼上、幢等上、塵落在身上、  
天帝、彼諸衆生所有罪業、応墮惡道、地獄畜生、  
閻羅王界、餓鬼(七)阿修羅身、惡道之苦、皆悉不  
受、亦不為罪垢染汚。天帝、此等衆生、為一  
切諸仏之所授記、皆得不退転於阿耨多羅三藐  
三菩提。(八)大帝、何況更以多諸供具華鬘、塗香  
末香、幢幡蓋等、衣服瓔珞、作諸莊嚴、於四  
衢道、造窠堵波、安置陀羅尼、合掌恭敬、旋  
繞行道、歸依禮拜。天帝、彼人能如是供養者、  
名摩訶薩埵。真是仏子、持法棟梁、又是如来  
全身舍利窠堵波塔。

爾時閻摩羅法王、於時夜分來詣仏所。到已、  
以種種天衣妙華塗香莊嚴、供養仏已、繞仏七  
匝頂礼仏足、而作是言。我聞如来演說讚持大  
力陀羅尼者、我常隨逐守護。不令持者墮於地  
獄。以彼隨順如来言教、而護念之。

塞・優婆夷(九)・族姓男・族姓女有つて、幢等の上に於いて、或  
いは見、或いは幢と相い近づいて、其の影、身に映じ、或い  
は風、陀羅尼の上、幢等の上を吹きて、塵、身上に落在せば、  
天帝よ、彼の諸もろの衆生の所有る罪業の、応に惡道の、地獄、  
畜生、閻羅王界、餓鬼、阿修羅身に墮つべきも、惡道之苦は  
皆な悉く受けず、亦た罪垢に染汚せられず。天帝よ、此等の  
衆生は一切諸仏の授記する所と為り、皆な阿耨多羅三藐三菩  
提より退転せざることを得。大帝よ、何況や更に多く諸も  
ろの供具華鬘、塗香末香、幢幡蓋等、衣服瓔珞を以て諸もろ  
の莊嚴を作し、四衢道に於いて窠堵波を造し、陀羅尼を安置  
し、合掌恭敬、旋繞行道、歸依禮拜するをや。天帝よ、彼の  
人能く是くの如く供養する者を摩訶薩埵と名づく。真に是れ  
仏子にして持法の棟梁なり。又た是れ如来の全身舎利の窠堵  
波塔なり」と。

爾の時、閻摩羅法王、時の夜分に於いて仏の所に来詣す。  
到り已わり、種種の天衣、妙華、塗香を以つて莊嚴す。仏を  
供養し已わりて仏を繞すること七匝し、仏の足に頂礼して、  
是の言を作す、「我、如来の大力陀羅尼を演說讚持するを聞く。  
我、常に隨逐して守護し、持つ者をして地獄に墮さしめざら

【校注】

- (一) 一切衆生ニ磧砂藏本同じ。大正藏本は「与一切衆生」に作る。
- (二) 亦為一切諸天子故説此陀羅尼印ニ原本に無し。磧砂藏本により補う。大正藏は「印亦為一切諸天子故説此陀羅尼印」(二六字)に作る。
- (三) 羅ニ原本は囉、大正藏本は「囉」に作る。磧砂藏本により校改す。
- (四) 虻ニ原本は蝱、磧砂藏本は「蝱」、大正藏本により校改す。
- (五) 人ニ大正藏本同じ。磧砂藏本は「人身」に作る。
- (六) 名ニ磧砂藏本同じ。大正藏本は「名為」に作る。
- (七) 苦惱ニ磧砂藏本は「苦」(一字)に作る。
- (八) 幢ニ原本と磧砂藏本無し。但し原本は「見」と「或」の間に「幢」の書込みあり。大正藏本脚注の黃檗版加筆本に抛り補う。
- (九) 餓鬼ニ磧砂藏本同じ。大正藏本は「餓鬼界」に作る。
- (一〇) 大帝ニ疑うらくは「天帝」の誤りであろう。
- (一一) 市ニ磧砂藏本同じ。大正藏本は「匝」に作る。
- (一二) 者ニ磧砂藏本同じ。大正藏本は「故來修學若有受持誦是陀羅尼者」に作る。



【口語訳】

仏は天帝に告げて言った、「私はこの陀羅尼を説いて汝に付嘱します。汝は（この陀羅尼を）善住天子に授け与えなさい。また（この陀羅尼を）受持えて誦誦し、（心に）思惟して愛樂み、（心で）憶念えて供養し、瞻部洲の一切の衆生のために広くこの陀羅尼を宣説しなさい。また一切の諸もろの天子のためにこの陀羅尼の印を説いて汝に付嘱します。天帝よ、汝は（この陀羅尼を）よく持ち（大切に）守護つて忘失させてはなりません。天帝よ、もし誰かが少しでもこの陀羅尼を聞くことができれば、千劫からこのかた、悪業による重い障を積ね造り、種々に生死（の世界に）に流転して、地獄・餓鬼・畜生（の三悪道の身）、閻羅王界（に存在する）阿修羅の身、夜叉・羅刹・鬼神・布单那・羯吒布单那・阿波娑摩羅（等の悪魔や妖怪）、蚊・虻・亀や狗・蟒蛇（巨大な蛇）、一切の様々な鳥や様々な猛獣、一切の蠢動く生き物から、果ては蟻子（等の虫けら）の身を（後生に）受けなくてはならなくても、更に（それ以上）重ねて受けることがなく、すぐに転生して諸仏如来や一生補処の菩薩と同じ会処に生まれるか、あるいは身分の高い婆羅門階級の家に生まれるか、（また）あるいは大きな王族武士階級の家に生れるか、（また）あるいは家柄の最勝れた家に生まれることが出来ましょう。天帝よ、この人がこのような貴い処に生れることが出来るのは、皆なこの陀羅尼を聞いたことによるのであつて、転生する処が皆な清浄になるのです。天帝よ、ひいては、菩提に向かうための修行の場として最も勝れた処に到ることが出来るのは、皆なこの陀羅尼を讚美することによるものです。（この陀羅尼の）功德はこの通りです。天帝よ、この陀羅尼を『吉祥』と名付けます。一切の悪道を浄めることが出来ます。この『仏頂尊勝陀羅尼』は、あたかも日蔵摩尼という寶石が浄らかで瑕や穢が無く、浄らなることは虚空と等しく、光焰が照らしわたつて周遍らないところは無いようなものです。もし諸もろの衆生がこの陀羅尼を持てば、また同じことです。また閻浮檀金（という幻の砂金）が明るく浄らかで柔軟であり、人の目を樂しませて、穢悪に染著されないようなものです。天

帝よ、もし衆生がこの陀羅尼を持てば、また同じことです。この「陀羅尼によつて得られる」善淨に乗じて善道に生れることができるでしょう。天帝よ、この陀羅尼が存在する処で、もし書写して流通し、受持して誦誦し、聽聞して供養をしたとしたなら、このように「実践」できた者の一切の惡道は皆な清淨となり、一切の地獄の苦惱は悉く皆な消滅するでしょう」と。

仏は天帝に告げた、「たとえば、この陀羅尼を書き写し、高幢の上に安置し、あるいは高山に安置し、あるいは樓上に安置し、もしくは、仏塔の中に安置する人がいた場合に、天帝よ、もし比丘比丘尼、優婆塞・優婆夷、善男子・善女人が、幢などの上に「掲げられた陀羅尼を」見たり、あるいは「その幢」に近づいてその影が「自分の」身に映つたり、あるいは風が陀羅尼の上や幢の上を吹いて、塵が「自分の」身の上に落ちたとすれば、天帝よ、その諸もろの衆生が所有する罪業によつて、地獄や畜生、閻羅王界「に存在する」餓鬼・阿修羅の身といった惡道に墮ちなくてはならなかつたとしても、「その」惡道の苦を、一切受けることはなく、また罪垢のために染汚することはないでしょう。天帝よ、これらの衆生は一切の諸仏に成仏を保証されて、皆な阿耨多羅三藐三菩提から退転することはありません。天帝よ、まして更に多くの色々な供具や華鬘、塗香や抹香、幢や幡蓋など、衣服や瓔珞を用いて様々に莊嚴し、四辻に仏塔を造り、「そこに」陀羅尼を安置し、合掌恭敬し、「右回りに」旋繞つて行道し、婦依礼拝する「功德」は言うまでもありません。天帝よ、そのようにきちんと供養する人を摩訶薩埵と名付けるのです。真にこれこそ仏子であり、「仏」法を持る棟梁です。またこれ（＝仏塔）こそ、如来の全身の舍利（を祀る）仏塔（と同じ価値）なのです」と。

その時、閻摩羅法王が夜分に仏の所に來詣た。到着すると、種々の天衣や妙華や塗香を用いて「そこを」莊嚴し、仏を供養してしまつてから、仏（の回り）を七回繞り、仏の足に頂をつけて礼拝して、次のように言つた、「我は、如来が大力陀羅尼を演説し讚持しているのを聞きました。我は、常に「その陀羅尼を持つ者を」随逐し守

護り、持つ者が地獄に堕ちないようにいたします。そのひとが如来の言教おしえに随順したがっているから護念おまわりいたしましう」と。

【注】

- (53) 阿修羅asura 梵語 *asura* の音写。血気さかんで、鬨争を好む鬼神の一種。仏教の六道説に取り入れられ、「人」と「畜生」の間に位置する。
- (54) 夜叉yakṣa 梵語 *yakṣa* に相当する音写。薬叉とも書かれる。主として森林に住むとされる神靈で、鬼神として恐ろしい反面、人に大いなる恩恵をもたらすともされた。仏教に取り入れられて、八部衆の一つとなった。(『岩波』p.806 参照)
- (55) 羅刹raśaṭ 悪鬼の一種。通力により、人を魅し、また食らうという。後には仏教の守護神になった。
- (56) 布单那putana 梵語 *putana* の音写。悪魔や妖怪を指す。一般に鬼・臭者と漢訳される。餓鬼の中でも最勝という。(『織田』p.1531・『望月』p.4428 等を参照)
- (57) 羯吒布单那kāputana 梵語 *kāputana* の音写。鬼の一種。「迦咭富单那」等とも音写される。奇臭鬼・極臭鬼などと意識される。梵語 *kāṭa* とは死屍または火葬場を表す。(『中村』p.151・p.157 参照)
- (58) 阿波娑摩羅apasmāra 梵語 *apasmāra の音写。鬼の一種で、原義は「意識の喪失・憑依」を意味し(『梵和大辞典』p.88)、「頗病鬼」なども漢訳される。(『織田』p.29 参照)*
- (59) 盜動含靈daudōganryō 一切の生き物。(『禪学』p.521 参照)
- (60) 一生補处issōhōjō 菩薩の修行が充足して、次の一生で仏となり、仏位を補うべき最後生にある菩薩の位。等覺位の菩薩を指す。(『望月』p.147・p.3847、『禪学』p.44、『織田』p.69 等を参照)
- (61) 刹利種śakya 「刹利種姓」の略。古代インドのカーストの一つ。武士や王族階級の身分(クシャトリア)を指している。(『中

村』p.827・『禪学』p.669)

(62) 日藏摩尼ニ不詳。

(63) 閻浮檀金ニ閻浮提(ニ我々の住む世界)の閻浮樹林のなかを流れる川に産するという砂金。黄金中最も清良なものとして、仏の尊容や仏像の塗金・金箔の形容とする。(『岩波』p.82・『禪学』p.116 参照)

(64) 苾芻苾芻尼ニ比丘(男性の出家修行者)と比丘尼(女性の出家修行者)。注15 参照

(65) 優婆塞優婆夷ニ男性の在家信者と女性の在家信者。(『中村』p.92 参照)

(66) 族姓男族姓女ニ善男子と善女人。すぐれた家系の若者のこと。また、正しい信仰を持つもの。(『中村』p.890・『岩波』p.504 参照)

(67) 摩訶薩埵ニ梵語 *maha-sattva* の尊号。「摩訶薩」も同じ。菩薩の尊称で、偉大な志を持つ人、すぐれた人、衆の上首となる人、大菩提を求める人の通称。(『中村』p.1277・『望月』p.4659・『禪学』p.1171 等参照)

## 〔5〕陀羅尼の用法

【原文】

爾時護世四天大王。繞(ニ)仏三市白(ニ)仏言、世尊

【書き下し】

爾(ニ)の時、護世四天大王(ニ)、仏を繞(ニ)ること三市(ニ)して、仏に白し

唯願如来、為我広説持陀羅尼法。爾時仏告四天王、汝今諦聽、我當為汝宣説受持此陀羅尼法。亦為短命諸衆生説。當先洗浴著新淨衣、白月円満十五日時、持齋誦此陀羅尼。滿其千遍、令短命衆生還得増寿。永離病苦一切業障悉皆消滅。一切地獄諸苦亦得解脫。諸飛鳥畜生含靈之類、聞此陀羅尼、一經於耳、尽此一身更不復受。仏言、若人遇大惡病、聞此陀羅尼即得永離、一切諸病亦得消滅、応墮惡道亦得除断、即得往生寂靜世界。從此身已後更不受胞胎之身、所生之處蓮華化生。一切生処憶持不忘、常識宿命。仏言、若人先造一切極重罪業、遂即命終、乘斯惡業、応墮地獄、或墮畜生閻羅王界、或墮餓鬼、乃至墮大阿鼻地獄、或生水中、或生禽獸異類之身、取其亡者隨身分骨、以土一把誦此陀羅尼二十一遍、散亡者骨上、即得生天。仏言、若人能日日誦此陀羅尼二十一遍、応消一切世間廣大供養、捨身往生極樂世界。若常誦念得大涅槃、復増寿

て言わく、「世尊よ、唯だ願わくば如来よ、我が為に広く陀羅尼を持つ法を説け」と。爾の時、仏、四天王に告ぐ、「汝、今、諦聽せよ。我當に汝の為に、此の陀羅尼を受持する法を宣説すべし。また、短命なる諸もろの衆生の為に説かん。當に先ず洗浴して新淨衣を着し、白月円満の十五日の時、持齋してこの陀羅尼を誦うべし。其の千遍に満つれば、短命の衆生をして、還つて寿を増すことを得せしめ、永く病苦を離れ、一切の業障ごとく皆な消滅せん。一切の地獄の諸もろの苦も、亦た解脫することを得ん。諸もろの飛鳥・畜生・含靈の類、此の陀羅尼を聞き、一たび耳を経れば、此の一身を尽くして更に復た受けざらん」と。仏言わく、「若し人、大惡病に遇うに、此の陀羅尼を聞かば、即ち永く離るることを得、一切の諸病も亦た消滅することを得、応に惡道に墮すべきも亦た除断することを得、即ち寂靜世界に往生することを得ん。此の身より已後、更に胞胎の身を受けず、所生の処は蓮華に化生せん。一切の生処に憶持して忘れず、常に宿命を識らんと。仏言う、「若し人、先に一切の極重の罪業を造り、遂に即ち命終わり、斯の惡業に乗じて地に地獄に墮し、或いは畜生・閻羅王界に墮し、或いは餓鬼に墮し、乃至は大阿鼻地獄に墮

命、受勝快樂、捨此身已、即得往生種種微妙諸仏刹土、常与諸仏俱会一处、一切如来恒為演說微妙之義、一切世尊即授其記、身光照耀一切仏刹土。仏言、若誦此陀羅尼法、於其仏前、先取淨土作壇、隨其大小、方四角作、以種種草華散於壇上、燒衆名香、右膝著地胡跪、心常念仏、作慕陀羅尼印。屈其頭指、以大母指押合掌、當其心上。誦此陀羅尼一百八遍訖、於其壇中如雲王雨華。能遍供養八十八俱胝菟伽沙那庾多百千諸仏。彼仏世尊咸共讚言、善哉希有真是仏子。即得無障礙智三昧、得大菩提心莊嚴三昧。持此陀羅尼法、心如是。仏言、天帝、我以此方便、一切衆生應墮地獄道、令得解脫。一切惡道亦得清淨。復令持者增益壽命。天帝、汝去、將我陀羅尼、授与善住天子。滿其七日、汝与善住俱來見我。

し、或いは水中に生じ、或いは禽獸異類の身に生ずべきも、其の亡者の身分に隨う骨を取り、土一把を以て、此の陀羅尼を誦すること二十一遍して、亡者の骨の上に散ずれば、即ち天に生ずることを得ん」と。仏言く、「若し人、能く日々に、此の陀羅尼を誦すること二十一遍すれば、應に一切世間の大の供養を消し、身を捨てて極樂世界に往生すべし。もし常に誦念すれば大涅槃を得、復た壽命を増して、勝れた快樂を受け、此の身を捨て已わつて、即ち種々の微妙の諸仏の刹土に往生することを得、常に諸仏と俱に一处に会し、一切の如来、恒に為に微妙の義を演説し、一切の世尊、即ち其の記を授け、身光、一切の仏刹土を照曜せん」と。仏言く、「此の陀羅尼を誦する法の若きは、其の仏前に於いて、先ず淨土を取りて檀を作り、其の大小に隨つて、方にして四角に作り、種々の草華を以て壇上に散じ、衆くの名香を焼き、右膝もて地に着けて胡跪し、心は常に仏を念じ、慕陀羅尼印を作せ。其の頭指を屈して、大母指を以て押して合掌し、其の心の上に當てよ。此の陀羅尼を誦すること一百八遍し訖わつて、其の檀中に於いて雲の如く王に華を雨せよ。能く遍く八十八俱胝菟伽沙那庾多百千の諸仏を供養す。彼の仏世尊、咸な共に讚じ

爾時天帝、於世尊所、受此陀羅尼法、奉持還於本天、授与善住天子。爾時善住天子、受此陀羅尼已、滿六日六夜、依法受持一切願滿。心受一切惡道等苦、即得解脫、住菩提道、增壽無量。甚大歡喜、高声歎言、希有如來、希有妙法、希有明驗。甚為難得、令我解脫。爾時帝釈（一〇）至第七日、与善住天子、將諸天衆、嚴持華鬘、塗香末香、宝幢幡蓋、天衣瓔珞、微妙莊嚴、往詣仏所、設大供養。以妙天衣及諸瓔珞、供養世尊、繞百千帀（一一）。於仏前立、踊躍歡喜、坐而聽法。爾時世尊舒金色臂、摩善住

て言わん、「善いかな、希有なり、真に是れ仏子なり」と。即ち無障礙智三昧を得、大菩提心莊嚴三昧を得ん。此の陀羅尼を持つ法は応に是くの如くすべし」と。仏、天帝に言う、「我れ此の方便を以て、一切衆生の応に地獄道に墮すべきに、解脫することを得しめ、一切の惡道も亦た清浄なることを得しめ、復た持つ者をして壽命を増益せしむ。天帝よ、汝去つて我が陀羅尼を將て善住天子に授与せよ。其の七日を満じて、汝、善住と俱に來たつて我に見えよ」と。

爾の時、天帝、世尊の所に於いて此の陀羅尼の法を受け、奉持して本天に還り、善住天子に授与す。爾の時、善住天子、此の陀羅尼を受け已わつて、六日六夜を満じて、法に依つて受持し、一切の願滿つ。応に一切の惡道等の苦を受くべきに、即ち解脫することを得て、菩提道に住し、壽を増すこと無量なり。甚だ大いに歡喜して、高声に歎じて言う、「希有なり如來、希有なり妙法、希有なり明驗。甚だ得難きこと爲るに、我をして解脫せしむ」と。爾の時、帝釈、第七日に至つて、善住天子と与に諸もろの天衆を將いて、華鬘、塗香末香、宝幢幡蓋、天衣瓔珞、微妙の莊嚴を嚴持して、仏の所に往詣して、大供養を設く。妙天衣及び諸もろの瓔珞を以て世尊を供

天子頂、而為說法、受菩提記。仏言、此經名  
淨一切惡道仏頂尊勝陀羅尼。汝当受持。爾時  
大衆、聞法歡喜信受奉行。

仏頂尊勝陀羅尼經

養すること、百千市を繞る。仏の前に於いて立ち、踊躍歡喜  
して坐して法を聴く。爾の時、世尊、金色の臂を舒べ、善住  
天子の頂を摩でて、為に法を説き、菩提の記を受く。仏言わく、  
「此の經を『淨一切惡道仏頂尊勝陀羅尼』と名づく。汝当に受  
持すべし」と。爾の時、大衆、法を聞いて歡喜し、信受し奉  
行す。

仏頂尊勝陀羅尼經

【校注】

- (一) 市||大正藏本は「匝」に作る。
- (二) 言||大正藏に拠れば、黄檗本は「告天帝」に作る。
- (三) 罪||大正藏本は「惡」に作る。
- (四) 授||大正藏本は「受」に作る。
- (五) 仏||大正藏本、無し。
- (六) 心||大正藏に拠れば、黄檗本は「合掌一心」に作る。
- (七) 押||大正藏に拠れば、明本は「庄」に作る。
- (八) 言||大正藏本は「告」に作る。
- (九) 我陀羅尼||大正藏本は「我此陀羅尼」に作る。



(十) 卍大正藏本は「匝」に作る。

(十一) 受大正藏は「授」に作る。

(十二) 淨大正藏はこの下に「除」の二字あり。

(十三) 聞法大正藏に拠れば、黄檗本は「聞仏所說法」に作る。

### 【口語訳】

その時、四天王は仏の周りを三回繞つてから、「次のように」仏に申し上げた、「世尊よ、(私たちの)願いは、ただ如来がわたしたちのために広く陀羅尼の教えを守る方法を説明して下さることです」と。その時、仏は(次のように)「四天王に告げた、汝たちよ、今こそ、しっかりと聴きなさい。わたしが汝たちのためにこの陀羅尼を受持っている方法を宣説しよう。また短命な諸もろの衆生のために説こう。当先に沐浴して新しい淨衣を着て、白月円満の十五日の時に、心身を清淨にしてこの陀羅尼を誦えなさい。(誦えて)千遍(という数)を満たせば、短命な衆生は寿命を増すことができ、永遠に病苦を離れて、一切の業障(も)ことごとく消滅するであろう。(そして)一切の地獄(で受ける)諸もろの苦しみからも解脱されるであろう。諸もろの飛鳥や畜生といった含靈の類も、この陀羅尼をひとたび耳で聞いたならば、この一身を限りとして、再び(同じ)身に生まれることはないであろう」と。「また」仏は言われた、「もし人が、大へん悪い病に遇つたときに、この陀羅尼を聞いたならば、たちまち(その病から)完全に回復して、また一切の病は消滅せ、(地獄・餓鬼・畜生の)惡道に墮ちるはずだ。たとしても(その惡報は)除断かれ、すぐさま寂靜世界に往生することができよう。(そして)この身から以後、二度と胞胎の身(で生)を受けず、生まれるところは(淨土の)蓮の花(の上)で、菩薩として化生であろう。

〔また〕一切の過去に生まれ〔生活して〕た世界のごときは記憶の底に残り忘れることがなく、常に宿命を識るであろうと。〔さらに〕仏は言われた、「もし人が先に一切の極めて重い罪業を造り、そのまま命が終つたとすれば、この〔犯した〕悪業のために地獄に墮ちるか、あるいは畜生や閻羅王界に墮ち、あるいは餓鬼に墮ち、ひいては大阿鼻地獄に墮ち、あるいは水中に生れかわり、或いは禽獸などの異類の身に生れかわらなくてはならないが、その亡くなった者の骨の随の骨を取り、〔別に〕一把の土〔を準備して、その土〕にこの陀羅尼を二十一遍誦え、亡くなった者の骨の上に〔その土を〕散れば、たちまち天に生ずることができようであろう」と。〔続けて〕仏は言われた、「もし人が日々、この陀羅尼を二十一遍誦えれば、きつと一切の世間の広大の供養にたすけられ、その身を捨てて極楽世界に往生することができようであろう。もし〔この陀羅尼を〕常に誦念えるならば、大いなる涅槃を得、また寿命が増して、すばらしい快樂を受け、この身を捨てて〔生まれ変わつて〕しまつてから、すぐさま種々な微妙しい諸仏の刹土に往生することができ、〔そこでは〕常に諸仏と一じ処に会まり、一切の如来が恒に〔その人の〕ために微妙しい義を演説し、一切の世尊は、その記を授けることになり、〔その〕身〔から発する〕光は一切の仏の刹土を照らすであろう」と。〔そして次に〕仏は言われた、「この陀羅尼を誦えるときの方法は、まずその仏前において、浄められた土を取つてきて檀を作り、その大小〔の大きさ〕に随つて四角形に作り、種々の草花を檀の上に散りばめ、衆の名香を焼き、右膝を地に着けて胡跪し、心には常に仏のことを念じて、〔手は〕慕陀羅尼の印を作りなさい。〔慕陀羅尼の印とは、〕その頭指を〔折り〕屈げて、大母指を押し合せて合掌し、その心の上に当てるのだ。〔そして〕この陀羅尼を一百八遍誦えてしまつてから、その檀中に雲わき出るように、たくさんの花を雨きなさい。〔そうすれば〕八十八俱胝宛伽沙那摩多百千の諸仏を供養したことになる。〔そして〕彼の仏世尊〔たち〕は、皆そろつて『善哉、希有ことだ、眞の仏〔弟〕子だ』と讃じて言われるだろう。〔そして〕すぐさま無障礙智三昧〔障礙が無い智慧の三昧〕を得、また大菩提心莊嚴三昧〔大い

る菩提の心で莊嚴かざられた三昧さんまいを得られるであろう。「以上」この陀羅尼だらにを持つる方法は、このようにしなければならぬ」と。仏は天帝に言われた、「わたしは、この〔陀羅尼による〕方便ほうぼうで、地獄道に墮おちなくてはならない一切いっけつの衆生しゆじやうを〔そこから〕解脱げつたいし、一切いっけつの悪道も清浄けいじやうにさせ、また〔陀羅尼を〕持つる者の寿命じゆめいを増益ぞうえきさせるのだ。天帝よ、あなたは〔ここを立ち〕去り、わたしの〔説いた〕陀羅尼を善住天子ぜんじゆうてんしに授与じゆしなさい。〔そして〕その〔教え通りに〕陀羅尼を誦となえる修行しゆぎやうをし、七日を満まん〔了〕してから、あなたは、善住ととも私あに見あいに来なさい」と。

その時、天帝は世尊よそじんのところでこの陀羅尼だらにの法おしえを受け、大切に持つて自分の住む天界てんがいに還り、善住天子ぜんじゆうてんしに授与じゆした。そして善住天子ぜんじゆうてんしはこの陀羅尼だらにを受けてしまうと、六日六夜むくじつむくや〔の修行〕を満まん〔了〕するまで、法おしえに依よつて受持うけもちし、一切いっけつの願ねがいが満まんつた。受けなくてはならないはずだった一切いっけつの悪道あくだうの苦しみも、たちまちに解脱げつたいすることができて、菩提ぼだいの道みちに〔安〕住すまして、量りやうりしれないほど寿じゆ〔命〕が増まえた。〔そこで〕甚大ひじやうに歡喜えんぎんで、声高こゑたかに歎なげえて言いつた、「なんと希有きゆうい如来にがた、なんと希有きゆうい妙法めうぽう、なんと希有きゆうい明驗めいけんだ。とても得難えづかいことなのに、わたしを解脱げつたいさせて下さいました」と。そして帝釈ていせき〔天〕は、第七日しちじつ目めに至いたつて、善住天子ぜんじゆうてんしとともに諸しよもろの天衆てんしゆを將しやういて、華鬘けわまんや塗香とけい・抹香まけい、宝幢ほうじやう・幡蓋ばんがい、天衣てんい・瓔珞えいらくといった、微妙めうめうなる莊嚴かざりを嚴げんかに〔捧げ〕持つて、仏のところに往詣おうぎぎ、大供養おほくやうを設たてつた。〔そして〕妙なる天衣てんいや諸もろの瓔珞えいらくで世尊よそじんを百千ひやくせんりにも繞かこんで供養くやうし、仏の前に立つと、踊躍おどりあそつて歡喜えんぎび、坐まつて法おしえを聴きいた。その時、世尊よそじんは金色こんじきの臂うでを舒のばして、善住天子ぜんじゆうてんしの頂あたまを摩なで、〔彼ら〕のために法おしえを説とき、菩提ぼだいの記よげんを授たまけた。仏は言いわれた、「この経きやうを『浄一切悪道じやういっけつあくだう仏頂尊勝陀羅尼ぶつていそんじやうとうらに』と命名めいめいする。おまえたち、きつと〔この経を〕受持うけもちりなさい」と。その時、大衆おほしゆは法おしえを聞きいて歡喜えんぎび、〔教えを〕信受しんじゆじて奉行じゆじやうした。

『仏頂尊勝陀羅尼經』〔終わり。〕

【注】

- (68) 護世四天王 〓 四天王のことで、四大天王とも言う。須弥山の中腹にある四王天の主で、帝釈天に任せ、仏法の守護を本願とし、仏法に帰依する人々を守護する。東方持国天・南方增長天・西方広目天・北方多聞天を言う。〔『広説』上 p.490〕
- (69) 洗浴 〓 湯浴みして、身を浄めること。〔『大漢和』六 p.1091〕
- (70) 淨衣 〓 神仏に祈請の際に着する清浄な衣。〔『大漢和』七 p.25〕
- (71) 白月 〓 インドの暦法で、月の前半、一日から十五日までを言う。なお、白月に対して月の後半を黒月という。〔『大漢和』八 p.13〕
- (72) 持齋 〓 齋持に同じ。戒律を守って身心を清浄にたもつこと。また、八戒を守ることと言う。
- (73) 業障 〓 成仏を妨げる悪業、正道の妨げとなる業。〔『広説』上 p.439〕
- (74) 寂靜 〓 涅槃の異名、悟りの世界のこと。〔『広説』中 p.733〕
- (75) 胞胎 〓 ① 胎生。母の胎内に宿ること。出胎の意で、人間に生まれること。② 生存。生存一般。ここでは生き物一般を指し、迷いの世界を意味している。〔『中村』p.1240 参照〕
- (76) 大阿鼻地獄 〓 阿鼻のこと。梵語 *Avīci* の音写、無間と訳される。八大地獄の第八。五逆・謗法の大罪を犯した者が生まれ墜ち、諸地獄中、もつとも苦しい地獄。
- (77) 幕陀羅尼印 〓 詳細は不明。幕陀羅は梵語 *mudra* の音写で印契・印相と訳されるが、この場合は、印相の一種の名称か。
- (78) 頭指 〓 人指し指のこと。〔『大漢和』十二 p.264〕
- (79) 大母指 〓 親指のこと。
- (80) 俱胝殞伽沙那庾多百千 〓 それぞれ無数を表す「俱胝」・「殞伽沙」・「那庾多」・「百千」の併記で無限であることを強調

している。梵伽は恒河に同じ、ガンジス川のこと、「梵伽沙」はガンジス河の砂の意。「那庾多」は「那由他」に同じ。(『大漢和』六-p.750、『広説』上-p.339、同下-p.1278等参照)

(81) 無障碍智三昧 無障碍とは認識するにあたつて障碍がない状態、智は是非・善悪を弁別する心の作用、三昧とは心が静かに統一されている状態、そこから心が迷いなく正しいものに向かつて安定している状態をさしていると類推される。(『広説』下-p.1625等参照)

(82) 大菩提心莊嚴三昧 大菩提心とは仏の心を得ようと願う心、莊嚴三昧とは法華三昧のひとつと言われ、本来、見えている徳を円満し、その徳が融通自在である状態を指す。つまり大菩提心で満たされている状態を表していると推量される。(『広説』中-p.1136、『大漢和』九-p.559等参照)

(83) 宝幢 法幢に同じ。仏法を旗にたとえたもの。仏や菩薩の説法の優れたことをたとえたもの。(『広説』下-p.1514)

(84) 幡蓋 幡と天蓋のことでもともととはインドで日射しや雨を防ぐために用いた傘蓋のこと。これがのちに仏具となった。(『広説』下-p.1372)

(85) 瓔珞 仏殿内で珠玉と花形の金属を編み合わせて垂らしたもの。もともとはインドの貴人の装身具で頭や首・胸から垂らして飾った。尊像や天蓋・仏前の莊嚴に用いられた。(『広説』下-p.1698)

## 〔附録〕御製序

【原文】

御製仏頂尊勝總持経呪序

朕惟如来演大乘教、開方便門。千経万法、無非為濟度群生、使不淪業報。仏頂尊勝總持経呪者、一切如来智印。広大慈悲、甚深希有。普利昏迷。冥巨海之津梁、幽暗之日月、飢渴之飲食也。世間善男子善女人一切衆生、能発菩提心持誦佩服者、其福德種種無尽、永脱諸悪苦趣、從無始以來百千億劫所積罪業、悉皆消除。若昼夜勤修不懈、当得諸仏灌頂、神天擁護、福寿無量。如是勝果、目覩其効、誠実不虛。朕君臨天下、閱斯民之執迷、所作所為、墮於悪趣、而不知若斯謬戾。誠為可矜。遂以是経呪、用俾河沙刹土、一切有情、均沾利益、寿延福増、同臻仏道。又況仏有誓盟、広済衆生、必先度忠孝。凡忠臣孝子、身生中国、又逢治

【書き下し】

御製、仏頂尊勝總持経呪の序

朕惟<sup>おほ</sup>うに、如来、大乘の教えを演<sup>の</sup>べ、方便の門を開く。千経万法、群生を濟度することを為し、業報に淪<sup>し</sup>まざらしめんとするに非ざるは無し。仏頂尊勝總持経呪は、一切如来の智印にして、広大なる慈悲は、甚深希有なり。普く昏迷を利する、実に巨海の津梁、幽暗の日月、飢渴の飲食なり。世間の善男子、善女人、一切の衆生の、能く菩提心を発<sup>おこ</sup>して持誦佩服する者は、其の福德種種無尽にして、永く諸悪苦趣を脱し、無始より以來、百千億劫積む所の罪業、悉く皆な消除せん。若し昼夜勤修して懈<sup>おこ</sup>らざれば、当に諸仏の灌頂、神天の擁護を得て、福寿無量なるべし。是くの如き勝果、其の効を目覩す。誠実にして虚しからず。朕、天下に君臨し、斯民の執迷し、所作所為、悪趣に墮するも、斯<sup>か</sup>くの若き謬戾を知らざるを閱<sup>み</sup>う。誠に矜<sup>あは</sup>れむ可しと為し、遂に是の経呪を以て、用いて河沙の刹土の一切の有情をして、均しく利益に沾<sup>うる</sup>ひ、寿延び福

世、受種種快樂、皆由其事君事親、能尽其道。又能敬礼三宝、修積善因、拳足之頃、即登覺路。若夫為惡之徒、昧於改悟、所作所為、日甚一日。造業深重、甘心墮落。身如沐漆、求潔實難。隕墜幽扃、何由出世。苟能回心向善、即此一路、可超出劫塵也。

永樂九年六月 日

増して、同に仏道に臻らしめんとす。又た況や仏に誓盟有り、広く衆生を濟うも、必ず先ず忠孝を度わんと。凡そ忠臣孝子の、身は中國に生まれ、又た治世に逢いて、種種の快樂を受くるは、皆な其の君に事え親に事えて能く其の道を尽くすに由る。又た能く三宝を敬礼して、善因を修積せば、拳足の頃に、即ち覺路に登らん。夫の惡を為すの徒の若きは、改悟に昧く、所作所為、日に一日より甚だしく、業を造ること深重にして、甘心して墮落す。身は漆に沐うが如く、潔を求めんとするも實に難し。幽扃に隕墜せば、何に由りてか世を出でん。苟し能く心を回して善に向かわんとせば、即ち此の一路、劫塵を超出す可きなり。

永樂九年六月 日

【校注】

(一) 御製仏頂尊勝總持經呪序に原本に無し。大正藏本に拠つて明本より補う。

【口語訳】

〔明の永楽帝〕御製、『仏頂尊勝総持経』〔と〕『呪』の序文

朕が思うに、如来は大乗の教えを説いて、「いろいろな」方便の入り口を開かれたが、「如来が説かれたその」何千もの經典や幾万もの法は、すべて群生を濟度し、「善悪」業の報いに淪まないようにさせるためのものであった。『仏頂尊勝総持経』〔とその〕『呪』は、一切の如来の智〔慧の〕印であり、「そこに込められた」広大な慈悲は、非常に深遠で希有なものであり、普く昏迷〔もの〕に利益をあたえる〔煩惱の〕大海〔をわたるため〕の津や梁であり、「無明の」幽暗をてらす日や月であり、「心の」飢えや渴きをいやす飲みものや食べもの〔に比すべきもの〕である。世間の善男子や善女人や一切の衆生で、きちんと菩提〔を〕求める〔心を〕発して〔この経・呪を〕持誦え佩服える者は、その〔得られる〕福德が種々で尽きることがなく、永遠に〔地獄・餓鬼・畜生といった〕諸々の悪苦の趣を脱し、無始から百千万劫にわたつて積みかさねてきた罪業も悉皆り消除てしまふだろう。〔また〕もし昼夜勤修んで懈らなければ、きつと諸仏の灌頂と神天の擁護を得て、幸福と長寿が無量〔に手に入る〕だろう。このような『仏頂尊勝総持経』と『呪』の〔勝しい果報について〕、『朕は〕その効能を目の当たりにしており、誠実であつて虚ではない。朕は〔皇帝として〕天下に君臨しているが、民衆が〔物事に〕執われて〔真理に〕迷い、〔地獄・餓鬼・畜生の〕悪しき趣に墮落する作爲をしながら、その様な謬戾に気付いていないことを憂えている。〔そして〕ほんとうに哀れむべきことだと思つたので、この『仏頂尊勝総持』経〔とその〕『呪』〔を〕版行することによつて、〔ガンジス〕河の沙の〔数ほど無数にある〕刹土の一切の有情に、均しく利益に浴させ、寿命が延び幸福が増えて、ともに仏道に至らせようとするものである。まして仏には「広く衆生を濟度するが、必ず先ず忠孝のものを濟度しよう」という誓盟がある。およそ忠義ある臣下や孝行な子どもで、その身は〔この〕中国に生まれ、また〔今のような〕治まつた世にであつて、種々の快樂を受け〔ていられ〕るのは、すべて君主に仕



え〔両〕親に仕えて、きちんとその〔人間としての〕道を尽くしているお蔭である。更にきちんと〔仏・法・僧の〕三宝を敬礼うやまつまつて善因ぜんいんを修積つみあげするならば、一挙手一投足の〔僅かな時間の〕間に、すぐさま覺りへの路みちへ登る〔ことができる〕だろう。悪事をおこなっている徒やからとなると、〔過ちを〕改めて〔正しい道を〕悟る〔ことが大切だといふ〕ことが分からず、〔その〕作爲わざないは日一日とひどくなつてしまい、深重ひどい〔悪〕業を造つて、甘んじて〔地獄に〕墮落してしまつてゐる。〔その〕身は〔真つ黒な〕漆で洗つてゐるようなものだから〔洗えば洗うほど汚れてしまふ〕、潔きれいにしようとしても全く難しい。〔そのまま死んで〕幽あやふいりちの肩おちこに隕墜おちこんでしまつたら、どうやつて〔迷いの〕世せかいを〔抜け〕出られようか。もしきちんと心を〔本来向かうべき方向に〕回かえして善に向かおうとするのならば、この〔『仏頂尊勝總持經呪』に説かれた〕一路こそ、劫無量の時に積みかさねてきたところの塵けがれを超出ぬけだすことができる〔ものな〕のである。

永樂九年（二四二）六月 日

【注】

(86) 仏頂尊勝總持經呪 〓 「總持」は「陀羅尼」の漢訳であるから、「仏頂尊勝陀羅尼經呪」と言うのと同じ。

(87) 仏有誓盟、広濟衆生、必先度忠孝 〓 典拠未詳。孝や忠に言及した經典としては、『仏說孝子經』一卷(Ti.6.No.687)がある。

【執筆者プロフィール】

牛尾弘孝

一九四八年兵庫県生まれ。九州大学大学院博士課程中退。大分大学教育福祉科学部教授。

並木優記

一九五〇年東京都生まれ。学習院大学院博士課程単位取得。東京都金龍寺住職。妙心寺派教化センター教学研究委員。

廣田宗玄

一九六七年兵庫県生まれ。花園大学大学院博士課程修了。兵庫県順心寺副住職。妙心寺派教化センター教学研究委員。文学博士（花園大学）

朝山一玄

一九五九年島根県生まれ。早稲田大学大学院博士課程単位取得。島根県観音寺住職。妙心寺派教化センター教学研究委員。花園大学非常勤講師。

川合圭介

一九五七年広島県生まれ。大谷大学大学院佛教学専攻博士後期課程単位取得。北海道真宗佛光寺派大願寺住職。

徳重寛道

一九六六年北海道生まれ。北海道大学大学院修士課程修了。北海道明心寺住職。妙心寺派教化センター教学研究委員。

木村俊彦

一九四〇年京都府生まれ。東北大学大学院博士課程修了。京都府養徳院先副住職。四天王寺国際仏教大学教授。国際仏教文化研究所長。文学博士（東北大学）。

矢多弘範

一九七〇年大分県生まれ。東洋大学卒業。大分県曹源寺住職。妙心寺派教化センター教学研究委員。

野口善敬

一九五四年福岡県生まれ。九州大学大学院博士課程中退。福岡県長性寺住職。妙心寺派教化センター教学研究委員。福岡女子大学非常勤講師。

【編集後記】

臨濟宗本山から発行される初めての本格的な学術論文集である『臨濟宗妙心寺派教学研究紀要』は、このたび第三号が発刊されることになった。創刊に至るまでの道程は必ずしも平坦ではなかつたが、既刊号に掲載された論文がいずれも内容豊富なものであつたことによるのであろう、宗門内外の購読予約は予想を超えて多く、まずは順調に軌道に乗りつつあると言つてよいだろう。

本号にも、四名の研究者の方々による素晴らしい研究成果を取めている。牛尾弘孝氏は、山崎闇齋の悟道体験の変遷を、禅学の豁然大悟、朱子学の豁然貫通、垂加神道の神性降臨の順に論じて、闇齋の求めたものを分析された。川合圭介氏は、盤珪の説法をさまざまな角度から分析することでその真意を明らかにし、人間が依つて起つべき基準を見出そうとされた。廣田宗玄氏は、大慧宗杲による「無字」の工夫の主張と趙州從諗の立場との比較に加え、趙州の「狗子無仏性話」が異類中行を主張するものだったかという問題について検討された。また木村俊彦氏には、第二号に続いて大円宝鑑国師語録の内容を紹介していただいた。いずれも臨濟宗学に資する貴重な研究である。

臨濟宗妙心寺派では開山無相大師の六百五十年遠諱を平成二十一年に控え、各部署における準備作業がよいよ本格化してきた。教学部においても教学研究、布教研究などの委員会において遠諱に向けてのさまざまな研究活動に力を入れているが、この研究紀要にも無相大師に関する研究論文が投稿されることを期待している。豊富な資料に恵まれているとは言えないけれども、充実した研究が成されるよう望みたい。

なお、投稿予定の論文が未提出に終わるなどのトラブルのために、今回も発刊が予定時期より大幅に遅れてしまい、寄稿者の方々、購読予約者の方々をはじめ多数の皆様にご迷惑をおかけする事態となつたことを深くお詫び致します。

(朝山一文)

『臨濟宗妙心寺派教学研究紀要』論文執筆要項』

《テーマ》 臨濟宗を中心とした禪宗に関するもの。

(ただし、仏教全般に互る内容で、宗学に資すると考えられるものについては、これを認める。)

《枚数》 原稿用紙四十枚程度(注を含む)

《書式》 本文は日本語とする。

・縦書きを原則とする。(サンسكريット等の資料を中心とした論文の場合は、横書きも認める。)

・本文・資料共に漢字は原則として当用漢字を用いる。

・資料として書き下し文を用いる場合、仮名遣いは新旧任意とする。

・資料を口語訳した場合には必ず原文を付す。

・ワープロの場合は、打ち出し原稿とテキストファイルのフロッピーを提出のこと。

《応募先》 〒六一六一八〇三五 京都市右京区花園妙心寺町六四

妙心寺派宗務本所 教化センター TEL〇七五―四六三―三二二一代

※封筒の表に「紀要原稿在中」と明記のこと。

《締め切り》 毎年十二月末日(厳守)

《発刊》 翌年四月(予定)

臨濟宗妙心寺派教学研究紀要 第三号

平成十七年 四月十五日 発行

発行人 細川景一

編集 妙心寺派宗務本所教化センター

印刷所 鑑梅田印刷所

発行所 妙心寺派宗務本所教化センター

〒六一六一八〇三五

京都市右京区花園妙心寺町六十四

電話 (〇七五) 四六三一三一二

ISSN 1348-3455